

THE  
FUTURE  
IS  
ART

Tokyo Tokyo FESTIVAL  
Interview

文化でつながる。未来とつながる。  
THE FUTURE IS ART

*Tokyo* Tokyo  
FESTIVAL

# 文化でつながる。 未来とつながる。

東京はアートのかを信じている。

それは私たちのこれからを描く力だ。  
それは違いを受け止め、通じ合おうとする力だ。

2020年。  
東京はその力を世界に示したいと思う。

伝統と現代が、  
そして世界中の文化が交差する  
東京だからできること。

Tokyo Tokyo FESTIVAL  
それは、アートでつながる  
未来とつながる文化の祭典。

2019年3月発表

---

## Tokyo Tokyo FESTIVALから未来へ

世界中で猛威を振るう新型コロナは、社会に大きな打撃を与え、芸術文化もその影響を受けています。

2020年に向けて進めてきた Tokyo Tokyo FESTIVAL も、スペシャル13をはじめ多くのプログラムが延期や中止を余儀なくされました。しかし、アーティストをはじめ文化を取り巻く人々は、こうした状況と向き合い、芸術活動の再開、継続に向け、果敢なチャレンジを続けています。

新しい行動様式が浸透し、芸術文化の意義や役割が問い直される中、これまでにない表現や作品も生まれようとしています。芸術文化には、人々をつなぎ、閉塞感に満ちた社会を回復させる力、活力をもたらす力があるはずです。

東京はアートのかを信じ、Tokyo Tokyo FESTIVAL を通じて、未来を描いていきます。

2021年5月発表

---

## THE FUTURE IS ART

# Interview

今、東京のアートを取りまく状況は？  
あたらしい時代にあたらしい気持ちでアートに携わる人たちは  
何をどう考え、取り組んでいるのか。  
その想いを伝える連続取材を行いました。

### 記事一覧

組織名や肩書は公開当時のものとなります。

<b>Vol.1</b> (前編)	東京芸術祭総合ディレクター <b>宮城聰さん</b> .....	<b>03</b>
<b>Vol.1</b> (後編)	東京芸術祭総合ディレクター <b>宮城聰さん</b> .....	<b>05</b>
<b>Vol.2</b>	東京都交響楽団 演奏統括部 <b>舘岡吾弥さん</b> .....	<b>07</b>
<b>Vol.3</b>	芸術家と子どもたち事務局長 <b>中西麻友さん</b> .....	<b>10</b>
<b>Vol.4</b> (前編)	TURN 監修/アーティスト <b>日比野克彦さん</b> .....	<b>13</b>
<b>Vol.4</b> (後編)	TURN 監修/アーティスト <b>日比野克彦さん</b> .....	<b>15</b>
<b>Vol.5</b>	Shibuya StreetDance Week 2020 アンバサダー/アーティスト <b>三浦大知さん</b> .....	<b>17</b>
<b>Vol.6</b>	能楽師 <b>友枝雄人さん</b> .....	<b>19</b>
<b>Vol.7</b>	東京都現代美術館参事 <b>長谷川祐子さん</b> .....	<b>22</b>
<b>Vol.8</b>	江戸東京博物館副館長 <b>小林淳一さん</b> .....	<b>26</b>
<b>Vol.9</b>	日本芸能実演家団体協議会 会長/狂言師 <b>野村萬さん</b> .....	<b>28</b>
<b>Vol.10</b>	アーティスト/ライゾマティクス主宰 <b>真鍋大度さん</b> .....	<b>31</b>



THE FUTURE IS ART

## Interview Vol.1 前編

東京芸術祭総合ディレクター 宮城 聡さん

多様な価値観を認め合う東京の魅力が詰まった「東京芸術祭2020」。

今こそ、精神に自由な外出を。

2020/10/30 公開



東京芸術祭総合ディレクター 宮城聡さん  
© ATARASHI Ryota

本来であれば今年の7月から開催予定だった、東京2020オリンピック・パラリンピック。新型コロナウイルスの世界的流行により、同時期に東京で開催予定だったさまざまな文化イベントも、延期または中止となりました。

WHOによるパンデミック宣言から半年。この秋、“withコロナ時代”に対応した新しい表現方法を模索しながら、豊島区池袋エリアを中心に「東京芸術祭2020」が開催されています。文化・芸術活動が持つ意味や、舞台芸術の新しい楽しみ方について、東京芸術祭総合ディレクター・宮城聡さんにお聞きしました。

### 「分断」が進行する時代の、東京の価値とは

東京芸術祭は「世界で5本の指に入る舞台芸術祭」に発展することを目指して取り組まれてきた、東京都の文化事業です。今年はオリンピックイヤーとして、より大きな盛り上がりが見込まれていました。

「緊急事態宣言が出て一旦全て中止になり、やはり最初は打ちひしがれましたね。『3カ月くらい劇場が閉まっても、誰も困らないじゃないか』『こんな時期に芸術が必要だなんてワガママだ』というような声も大きかったですから。

コロナ禍のただなかでもやるべきか、根底から考えました。文化事業に使う予算があるなら、1円でも多くコロナ対策に使った方がいいんじゃないか——。自問する中で、日本における東京の役割、東京の価値って何だろうと考えてみたんです」



東京芸術祭2020 <https://tokyo-festival.jp/2020/>

2020年9月30日(水)～11月29日(日)

東京芸術劇場、あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)、東京建物 Brillia HALL(豊島区立芸術文化劇場)、GLOBAL RING THEATRE(池袋西口公園野外劇場)ほか 池袋周辺エリア

感じているのは、多くの人が“二分法的思考”に陥っていること。白か黒、善か悪、敵か味方……のような。

「Zoom飲みも意見が違う人とはしないでしょう(笑)。日本中で『うんうん。そうだよ』と、ツーカーな人としか話さなくなっている。感染者が少ない地域で1人でも出ると『異物は排除しろ』みたいな大変な騒ぎで、まるで戦前のような排他意識。その人なりの事情とか、自分も同じ立場になり得るとは考えられなくなり、他者への共感が衰え“分断”が進行している。その中で東京は“二分法じゃない思考”を、維持していかないといけないのではないかと、思っただけです」

今、なぜ私たちは東京に住んでいるのか。「一人ひとりに考えてもらいたい」と宮城さん。いろんな人がいていい。

それぞれに居場所がある。それが、東京に住み続ける理由という人が多いのではないかと、と。

「東京は多様性が容認されています。そこが最大の価値。それを維持し続けるには、やはり文化・芸術の力が役に立つと思うんです。言い方を変えれば、文化事業を全部やめちゃったら結構ヤバいかもしれない。『この考え方だけが正解。あとは敵』みたいな空気は決定的な分断で、その二分法に加担しちゃうことになる。長い目で見ると『あの時、すくまづいことをしたね』と、なるかもしれない。『こういうのも“美”だよ』とか、いろんな考え方があることが一番分かりやすく提示されているのが芸術です。芸術が持つ『先入観を根底から疑ってみる力』を最大限に発揮して、大変だけどここは頑張って芸術祭をやった方がいい、という考えに落ちつきました」

## 歴史のまばたきで気付いた、古典演劇はwithコロナ様式

東京芸術祭2020では、約30のプログラムにおいて“三密”を避けることはもちろん、出演者、観客、スタッフともに安心・安全な形で工夫が凝らされています。



野外劇『NIPPON・CHA!CHA!CHA!』稽古の様子（撮影：大中小）



野外劇『NIPPON・CHA!CHA!CHA!』稽古の様子（撮影：大中小）

……と、そこで浮かんでくるのが「舞台って、本番中の役者同士は濃厚接触では？」という疑問。フェイスガードの使用や、万が一に備えて常に代役を立てられる態勢、リアルとオンラインの融合など、さまざまな対策がありますが、宮城さんには、ある気付きがあったのだそう。

「“三密こそ演劇”という考えも、それはそれでOK。僕も最初は三密を禁じられたら何もできないと思ったし、つくる側も一般のお客さまも、舞台は役者が顔と顔がくっつくくらいに濃厚接触するものという先入観があったと思うんですね。でも、歌舞伎とかギリシャ悲劇などの古典演劇は、あまり濃厚接触しない。なぜだろうと考えたら、実は舞台芸術の歴史の大半は疫病とともにあったんです。シェイクスピアが活躍した時代には、2度くらいペストの大流行がありますからね。

また、マイクなどのテクノロジーもないから、俳優は向き合わず、観客に向かって喋らないとセリフが聞こえなかった。かつて芝居はそういうものだったんです。

古典演劇は、withコロナ様式かもしれない。劇場が衛生的で明るく安全な場所になったのは、この100年くらい。

私たちが当たり前と思込んでいた思考を相対化できるコロナ禍は、まさに“歴史のまばたき”。僕にとってこれはインパクトでした」



野外劇『NIPPON・CHA!CHA!CHA!』準備の様子（撮影：大中小）



野外劇『NIPPON・CHA!CHA!CHA!』準備の様子（撮影：大中小）



多様な価値観を認め合う東京の魅力が詰まった「東京芸術祭2020」。

今こそ、精神に自由な外出を。

2020/11/20 公開

現在、開催中の東京芸術祭2020で行なわれた実験的な取り組みの一つが“オンラインとリアル”の融合です。ここでも、宮城さんならではの興味深い視点を伺いました。

## リアルとバーチャルは“フリーズドライ”な関係!?

「本当にまだまだ実験なので、こうすれば必ずうまくいけるとは言えないんですが……。もしかすると、バーチャルという手法によって相手役や観客の肉体に影響を与えることが可能なんじゃないか、という実験をしています」

「たとえば話ですが、日本の平安時代、自分の気持ちを打ち明ける時には手紙を書きましたよね。読む側も和歌にグッときたり、ときめいたり。同じ時代、ヨーロッパにはまだ紙がないんですよ。何か記録するには羊皮紙などにインク。コストと労力があるから、好きな人の家の窓の下で歌を歌った。つまり、窓の下で歌うのが肉体、手紙はバーチャル。

だけど、平安時代の恋愛は、手紙が十分肉体に訴えかけていたんです。手紙を読むだけで相手のニオイまで思い起こし、夜を共にした経験とか、ありありと思い起こす。

それが起こり得た理由の一つが、テクノロジーです。といっても、紙と筆ですけど。筆に墨をふくませてサラサラッと書くと、自分のエネルギーの状態が文字に表現される。大胆すぎるかしらなんて躊躇する気持ちや、思い切って言っちゃえという勢い、そんな体の様子がそのまま文字に現れますよね。読む側もそのエネルギーの流れを読み取れるから、自分の肉体も呼び起こされていく。

僕はそれを、“フリーズドライ”って言うてるんだけど(笑)。お湯をかけるのと元に戻る、みたいな。ヨーロッパよりテクノロジーが進んでいた。もう一つは、受け止める側に、そのリテラシーがあるということ。平安時代は子どもの頃から訓練されているから、書いた人のエネルギーの流れまで読み取れる。

つまり、テクノロジーと訓練が合わさって、手紙というバーチャルなものから肉体的な影響を受けるという現象が起こった。だからこれからは、演劇あるいはダンスが何かバーチャルな手法を使うとすると、テクノロジーとリテラシーが求められていくと思うんです。

最初はまだリテラシーがないから、映像を見ても分からなかったり、エネルギーが伝わらなかったと思うかもしれない。でももしかすると、それも訓練によって、わずかなデジタルな情報から脳内に肉体が立ち上ってくるようなことが可能になるかもしれません。そういう実験を、まさにこの“歴史のまばたき”である今、皆がするようになるのではないかと思います。

もちろん、本来の舞台芸術として肉体と肉体が出会う、生身の体と出会う経験は、いつまでたっても大事で、それはそれであった上で、演劇とか舞台芸術の品揃えが、ぐっと広がるということが起こるかもしれないですよ」



『ダークマスター VR』プリセット時場内の様子 (撮影：前田圭蔵/東京芸術劇場)



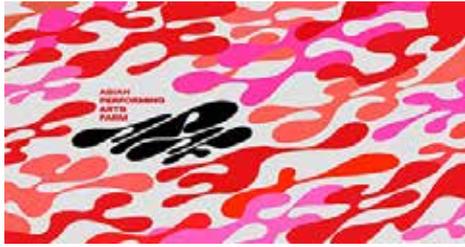
『ダークマスター VR』公演中の様子 (撮影：前田圭蔵/東京芸術劇場)



東京芸術祭総合ディレクター 宮城聡さん © KATO Takashi



『ダークマスター VR』 (タニノクロウ脚本・演出)



『APAF2020』

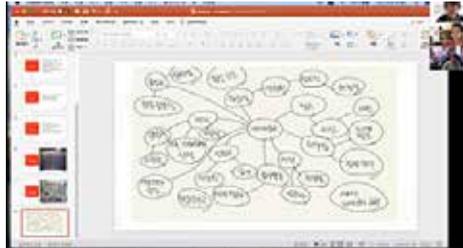
## 1 番難しいのが人材育成

総合ディレクターに就任した当初から「東京芸術祭の隠れた最大の目的は人材育成」と語ってきた宮城さん。オンラインでの人材育成とは――。

「結論だけまず言っちゃうと、人材育成がオンラインでは一番難しいです(苦笑)。そこが最大の課題かもしれないですね。表現についてはいろいろ良いことも起こると思うけど、人材育成については、正直なところ不安です。どうやったらカバーできるか、考える必要があると思います。バーチャルだけでなく、どうやったらリアルに出会えるのか、ということの追求もしながらですね」



ミニゲームを通してコミュニケーションをはかる様子 (APAF Lab)



各自が研究テーマを設定しリサーチを深めていく (APAF Lab)

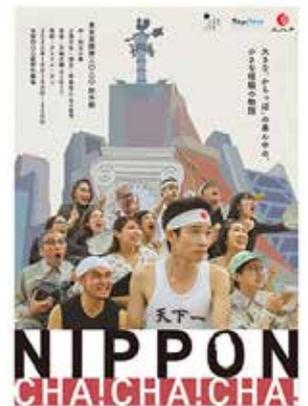


8カ国のメンバーが参加する APAF Lab のオンライン初日打ち上げ (8月)

## 心のステイホームを解く契機に

最後に、都民へのメッセージを。

「人間は危機的状況になると、“寄らば大樹の陰”と、一つの考え方にくっつくような現象が起きます。ですが、実はそれは脆弱な社会で、一方からの風でポキッと折れてしまう。戦前の日本とか、全体主義が進行する時ってそういう状態です。いろんな考え方がある方が、社会がしぶとくなります。一つの考え方に閉じこもってしまうと、外出できる状況になっても心がステイホームしちゃう。これを解かなければ、社会は脆弱になってしまいます。だから今こそ、精神に自由な外出をさせましょう。演目は極めて多彩です。コアな演劇ファンも、これまで一度も劇場に足を運んだことのない方々も、『これは!』と思える入口が用意されています。ぜひ足をお運びいただき、アーティストたちの挑戦を応援してください」

野外劇『NIPPON・CHA!CHA!CHA!』  
[https://tokyo-festival.jp/2020/program/nippon\\_chachacha/](https://tokyo-festival.jp/2020/program/nippon_chachacha/)

撮影：住田磨音



撮影：住田磨音



撮影：住田磨音

取材・編集：加藤瑞子

### プロフィール

宮城 聡 (みやぎ・さとし)

1959年東京生まれ。演出家。SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。東京芸術祭総合ディレクター。東京大学で小田島雄志・渡辺守章・日高八郎各師から演劇論を学び、1990年ク・ナウカ旗揚げ。国際的な公演活動を展開し、同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出で国内外から高い評価を得る。2007年4月SPAC芸術総監督に就任。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を次々と招聘、またアウトリーチにも力を注ぎ「世界を見る窓」としての劇場運営をおこなっている。2017年『アンティゴナ』をフランス・アヴィニョン演劇祭のオープニング作品として法王庁中庭で上演、アジアの演劇がオープニングに選ばれたのは同演劇祭史上初めてのことであり、その作品世界は大きな反響を呼んだ。他の代表作に『王女メディア』『マハーバーラタ』『パール・ギュント』など。2006～2017年APAFアジア舞台芸術祭(現アジア舞台芸術人材育成部門)プロデューサー。2019年東アジア文化都市2019豊島舞台芸術部門総合ディレクター。2004年第3回朝日舞台芸術賞受賞。2005年第2回アサヒビール芸術賞受賞。2018年平成29年度第68回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2019年4月フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。



THE FUTURE IS ART

## Interview Vol.2

東京都交響楽団 演奏統括部 舘岡 吾弥さん

# 「オーケストラの生の音を体感してほしい」

その思いが原動力となり、コロナ禍において『サラダ音楽祭』を開催し、成功させるまで。

2020/10/30 公開



東京都交響楽団 演奏統括部 舘岡吾弥さん（撮影：逸見幸生）

2020年9月、新型コロナウイルス感染拡大の影響下『TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2020（愛称：サラダ音楽祭）』が開催されました。音楽祭を成功させた担当者に、開催までの苦労やオーケストラの魅力についてお話を伺いました。

## 都民のために誕生した『サラダ音楽祭』とは？

「本当に今年の音楽祭を開催できるのか、その不安は常にありました」

そう語るのは、東京都交響楽団（以下：都響）演奏統括部の舘岡吾弥さん。

9月に開催された『SaLaD（サラダ）音楽祭』の計画全体の進行管理や当日の運営管理を行った方です。

「まず『SaLaD（サラダ）音楽祭』について説明しますと、都民の皆さんにクラシック音楽やオーケストラをより身近に感じていただくために東京都と都響が、2018年から開催している音楽祭で、『SaLaD』は、Sing and Listen and Danceの頭文字をとっています。その名の通り、歌う、聴く、踊るをコンセプトに、オーケストラのコンサートを中心に、ワークショップなど誰もが「体験できる」プログラムを展開しているのですが、今回は新型コロナウイルス感染拡大の影響で予定していた内容を変更せざるをえませんでした。それでも赤ちゃんから入場OKの『OK!オーケストラ』を9月5日に、演出振付家の金森穰さんが率いる、日本を代表するダンスカンパニー『Noism Company Niigata（ノイズム・カンパニー・ニイガタ）』とコラボレーションした『音楽祭メインコンサート』を9月6日に東京芸術劇場コンサートホールにて開催しました」



『サラダ音楽祭』で指揮を振った  
東京都交響楽団音楽監督の大野和士氏



『音楽祭メインコンサート』にて圧倒的なパフォーマンスで客席を魅了した『Noism Company Niigata（ノイズム・カンパニー・ニイガタ）』の皆さん



『OK!オーケストラ～赤ちゃんから入場OK!』にてダンスを披露したのはこの日のために結成された『スーパーエイト（サラダ音楽祭ダンス）』



(撮影：逸見幸生)

## どうしても思い出された東日本大震災のこと

多くのコンサートやイベントが中止や延期になる中で、館岡さんは2011年の東日本大震災のとき、福島で働いていた頃のことを思い出したとおっしゃいます。

「感染症と大震災の大変さをくらべることはできませんが、震災が起こった直後は『音楽活動よりも、シヨベルカーでも動かされた方がよほど役に立つのに』と音楽に携わっていることが無意味に思えてしまって。でもそのうち、状況が少しずつ回復していく中で、演奏や歌を聴いてくれた方々から、音楽を聴いている間は嫌なことを忘れられる、と言ってもらえるようになっていきました」

そうしたことで館岡さんは、「音楽はやはり生きていくうえで必要なものなんだ」と思えたそうです。

ところが、今回の新型コロナウイルス感染拡大の状況に関しては震災と違う点を感じたのだとか……。

「震災のときは、被災地や避難所に『音楽を聴きたい』という方がいれば演奏会が成立しました。でも新型コロナウイルスの場合、接触できない、集まらないということですので、とにかく自粛するしかなくて……」

## コンサート再開までの道筋を立てるため、 まず試演会を6月に開催

自粛が続く中、「まずは何が安全で何がリスクなのかを知らなければ前に進めない」という思いから都響では独自に試演会を行ったそうです。

「オーケストラのパートそれぞれの飛沫や距離感などを検証するため、ホール(東京文化会館)やエアロゾル測定の実験家、感染症専門医らの力を借りて行いました。試演会は、感染リスクを検証するためのものでしたから、検証結果によっては予定しているコンサートは実施できないと考えていました。結果的に、オーケストラの演奏はさほど危険ではないと判断できたので、『サラダ音楽祭』についても9月開催に向けて動き出したんです」

※試演会に関する詳細はこちら

東京都交響楽団(都響)演奏会再開への行程表と指針 ~「COVID-19影響下における演奏会再開に備えた試演」を受けて~  
[https://www.tmsa.or.jp/j/wp/wp-content/uploads/2020/07/Guidelines\\_ver.2.0.pdf](https://www.tmsa.or.jp/j/wp/wp-content/uploads/2020/07/Guidelines_ver.2.0.pdf)



©鈴木穰蔵

## 組み立てては壊す、その繰り返しでした

しかし、新型コロナウイルス感染拡大の状況はどう変化するかまったく予想もできず、中止や延期と常に隣り合わせの状態です。計画を進めていったそう。

「内容を組み立てては壊す、その繰り返しでした。都響の魅力は大人数大所帯のオーケストラ作品へのアプローチ。ファンの方もそう言ってくれる方が多いんです。なので、当初予定していた曲目も大編成の作品でしたが、今(の状況)ではそういうプログラムはできない。それで何ができるのか、編成、時間、人数を考えつつ何度も組み立て直しました」

リハーサルも今までのものとは違うところも多々あったそうで、まず手洗いや消毒、ソーシャルディスタンスを徹底したそうです。

「とにかく感染しない・させない。共演者もスタッフもそのことを第一に考えていましたが、リハーサルの間は、演奏家や舞踊家の皆さんは今の(新型コロナウイルス感染拡大の)状況を忘れていたかのように、パフォーマンスに没頭していました」

でもリハーサルが終わって、外食の制限等の注意事項を伝えたときに、コロナ禍にいるという現実一気に引き戻されてしまったね。今までにない、大変な願いもたくさんしましたが、コンサートをやりたい、成功させたいという気持ちは皆同じだったのだと思います」

## コンサート当日も1時間に1度は必ず消毒

「リハーサルがどんなにうまくいっても、その夜に感染者が出てしまえば中止せざるを得ないわけで、常に覚悟をしながら細心の注意を払う日々でした。幸い感染者は出ず、本番の日を迎えられたわけですが」



(撮影：逸見幸生)

コンサート当日はどのようなお気持ちで迎えられたのでしょうか？

「音楽祭を発信源としたクラスターを発生させてはならない、ということは常に頭においていました。感染症対策を徹底し、入り口ではサーモグラフィーによる検温も行い、チケットの半券はお客さまご自身で切り取ってもらうなど、できる限り接触の機会を減らしました。それに控室などの舞台裏も1時間に1度は消毒を行いました」



『サラダ音楽祭』では、『OK! オーケストラ』と『音楽祭メインコンサート』の他に、会場周辺にて『SaLaDミニコンサート』も開催



東京都交響楽団

## 芸術と芸術がぶつかりあった完成度に感じた達成感

対策を徹底したこともあり、感染者が出ることはなくコンサートは無事に終了。どんな思いだったかを尋ねると、

「コロナ禍という状況を超越して、高いレベルの芸術と芸術のぶつかり合いにより想像をはるかに超えた完成度の高いコンサートとなったことに、言葉では言い表せない達成感がありました。これができるんだから次へも進める。注意をして計画を積み重ねればコロナ禍でもコンサートはできる、そのことを実証できたと感じました。ただ残念だったのは会場のキャパシティを半分以下にせざるをえなかったこと。一人でも多くの方に観て、聴いて、体感してほしい内容でしたので」

そう話しながらも確かな手応えは感じたと言います。開催してあらためて感じたこととは

「密にならないように、盛大にならないように、という今まで目標にしていたことを捨てなければならぬ状況での開催でしたので、正直、ただ開催しただけのイベントになってしまわないだろうかという不安はありました。

しかし、ご来場くださったお客さまが本当に楽しそうな笑顔でお帰りになる姿を見て、我々が提供すべきものをしっかりと届けることができたことを確信しました。

このことは今後の活動への大きな一歩になったと思います。このままでは本当に文化的なイベントができなくなってしまうという危機感があったので、やり遂げられて本当によかったです」

## オーケストラの生の音をホールで体感してほしい

では、『サラダ音楽祭』を終えて、これからの音楽コンサートのあり方や、可能性など、どのようにお考えでしょうか？

「今、ジャンルを問わずたくさんの方々がWEBやリモートを駆使して新しいことにチャレンジしていますよね。都響でも過去のコンサート映像や、無観客で行ったコンサートの様子を収録した『春休みの贈り物』といったコンテンツをYouTubeで配信し、『サラダ音楽祭』においてもWEBワークショップや記録映像を編集し、発信してきました。

そういうものを観て、今までクラシックやオーケストラに興味がなかった方々にも『こんなに素敵なものなんだ』って知ってもらって、コンサートに行ってみたい、行ってみようって思ってもらえたら嬉しいです。

もちろんこうしたWEBコンテンツの普及や進歩は嬉しいことですが、やはりオーケストラの生演奏の素晴らしさをぜひホールで味わっていただきたい。空間と一緒にいて、音に包まれる、風が吹く感じとでも言ったらいいか……。

『音の震えを体感できる』アコースティックな響きというのは、やはり代わりのないものであり、実際にオーケストラから鳴る音のシャワーを浴びると、まったく別物なんだと実感できるので。WEBを活用したコンサートスタイルが成長すればするほど、それは一つの文化として確立されていくでしょうから、なおさらアコースティックな響きを限られた空間で共有する時間が重要視されていくのではないかと思います」

最後に来年以降の『サラダ音楽祭』に関して伺ってみると、

「ベストなパフォーマンスができるようにスタッフが準備し、出演者が発信して、それを受け取った観客の反応に呼応して演奏が深まり、さらにそれを感じて次のステージにスタッフが繋ぐ。このループが生コンサートの大切な部分であり最大の魅力なのだと思います。『サラダ音楽祭』に来場されたときは、どうぞ自然体で感じ、楽しんでください。『オーケストラのコンサートだから……』などと身構える必要はありません。感じるままを受け取り、反応し、ループさせ、音楽祭と一緒に作っていただければと思います」

取材・編集：東美津子

### プロフィール

館岡 吾弥 (たておか・ごや)

1977年、神奈川県生まれ。大学時代に入っていたオーケストラ部の先輩から紹介を受け、東京都交響楽団(都響)にてステージスタッフとして仕事を始める。その後、NHK交響楽団(アシスタント・ステージマネージャー)、サントリー・パブリシティ・サービス(ホール運営)、いわき芸術文化交流館アリオス(企画制作)を経て、2014年に再び都響へ入団。現在に至る。



アーティストと子どもたちの出会いの場を提供。

非日常の中で引き出される、子どもの可能性。

2020/11/30 公開



芸術家と子どもたち事務局長 中西麻友さん

「パフォーマンスキッズ・トーキョー」(以下 PKT) は、特定非営利活動法人「芸術家と子どもたち」が、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京と実施しているプロジェクトです。学校、ホール、児童養護施設などにプロの現代アーティストを派遣し、10日間程度のワークショップを開催。この間に子どもたちが主役の舞台作品をつくり上げ、最終日に発表します。しかし、新型コロナウイルスの影響で2020年春には学校が休校に。子どもたちはもちろん、保護者や教師など周囲の大人たちも戸惑う状況の中、どのようにプロジェクトの再スタートを切ったのか。2020年9月までの約半年間の状況について、芸術家と子どもたち事務局長の中西麻友さんに聞きました。

## 毎回新しい発見がある

PKTは2008年に活動を開始して以来、約8600人の子どもたちにアーティストとの出会いの場を提供してきました。中西さんがプロジェクトに携わる中で、感じていることは?

毎回、新しい発見があって、飽きることはありません。

人前で発表するのが苦手だと思われていた子が堂々と舞台上に立ったり、友人関係で困っていた子が新しい友達に出会って、ホールに通うことを楽しみにしてくれるようになったり。

小さな物語のような出来事が、いろんな現場で何かしら起こっていて、やりがいを感じます。最終日の公演では、それまでの過程を見ていることもあり、毎回心が動かされて感動します。

保護者からは「1人でバスや電車に乗って通うことが、良い経験になった」「子どもがイキイキと舞台の上で表現する姿に感動した」「涙が出た」などの声。10日間で子どもは変化できるんですね。

変化というか、子どもには元々たくさんの可能性があって、それがいつも出会わない大人と出会うことで引き出されるのだと思います。

もちろん、日頃から保護者や先生も引き出そうとしていますが、それとはちょっと違うアプローチで関わることで、違う一面が見えるようになる。

アーティストが、“魔法使い”のように子どもたちを変身させるという訳ではありません。

アーティストも、この体験で自分の表現を広げることができたり、相乗効果で面白いものが作れるのだと思います。

出演者募集! パフォーマンスキッズ・トーキョー Performance Kids Tokyo ダンスワークショップ&成果発表

参加費料 Admission Fee: 全2日間、全8日 15名

「舞」Dancing Japan

2020年8月(全8日間)ダンスワークショップ&成果発表  
「空」～ひかりマップ&おとマップ～  
振付・構成・演出: 安藤洋子(振付家・ダンサー)  
出演: 小学2年生～中学1年生の子どもたち

2020年8月(全8日間)ダンスワークショップ&成果発表  
「空」～ひかりマップ&おとマップ～  
振付・構成・演出: 安藤洋子(振付家・ダンサー)  
出演: 小学2年生～中学1年生の子どもたち

そのような子どもたちにとって貴重な場に、新型コロナウイルスの影響が……。

2、3月頃は進行中のワークショップが突然中止になり、子どもたちにお別れの挨拶もできないまま会えなくなるなど、日常が中断され、ただただ悩ましい日々でした。

夏になり再開された学校に行くと、校内の掲示物などから、人とのふれあいや声を出すことなど、たくさんの制約の中で子どもたちが過ごしていることを目の当たりにして、身体の感覚にもいろんな影響が出てくるのではないかと心配になりました。

プールも中止、クラスを越えて集まったり、学年集会みたいなこともやっていない。

そんな状況下でリアルに開催していいのか不安もありましたが、劇場等のガイドラインを参照し、アーティストやスタッフとどうすれば安心してワークショップを開催できるのか検討を重ね、8月の狛江エコルマホールから再開することになりました。

## 知り合いが誰もいない中に飛び込む体験

具体的に、昨年度までと異なる点は？

大きいホールなので参加者は30人定員でしたが、今回は3密を避けるため15人に。ワークショップ中のマスク着用や消毒はもちろん、長時間の集団活動によるリスク軽減のため、昼食をはさむ時間帯を無くしました。

スケジュールも、夏休み自体が短かったので10日間から8日間に短縮し、学校の新学期が24日から始まるということで、本番を22日に前倒しました。

今回の参加は小学2年生から中学1年生まで。子どもたちにとっても、誰かと“リアルに集まる”のは久しぶりのことだったと思います。子どもたちが自然と交代で消毒液係を始めるなど、そこまでやらなくても大丈夫だよ、と思うくらい非常に協力的でしたね。

演出面では舞台上で椅子を使うなど立ち位置を明確にして、間隔を保つ空間の使い方を工夫しました。本番は40分間。マスクは外しますが声は出さず、踊りのみです。

人間関係ができていない学校ではなくホールで初めて会う子たち同士ですが、一緒にお弁当を食べたり、お喋りしたりといったコミュニケーションが、なかなかとれなかったんですね。

しかも時間も短い。それでも仲良くなっているから不思議です。熱中症にならないよう小まめに休憩を取るんですが、雑談をする時間は少なくて、とにかく水分補給をしたらすぐ次、みたいな感じだったのに、いつの間にか「友達」という意識を持っている。面白いなと思いました。

「誰かと何かを一緒にする」ということを、もしかしたら無意識に求めていたのかもしれないね。広い舞台上で走り回るようなことも、子どもの身体が欲してたのかな、と。

子どもたちや保護者からは、どのような声がありましたか？

子どもたちからは……「また参加したい!」「友達が1人もいない環境に飛び込むことは初めてで、自信につながった」「いろいろな年齢、異なる学校から集まった参加者と知り合えたことは貴重な経験だった」などの他、多くの楽しみが奪われてしまったコロナ禍での開催に対する感謝の声を数多くいただきました。

また、中学生からは「決められたことをその通りやるのは簡単だけど、自分で考えて動くことが楽しかった」という声。保護者からも「それぞれが考えながら身体で表現していく姿に感動した」という声が多くありました。

## こういう時こそ、自分で考えることが必要

決まった振付を、皆で踊るのではないのですね。

皆で踊る用意された振付もありつつ、今回は直接的な触れ合いができないなどの制約がある中でも、舞台をいかに楽しむか、安藤さんがさまざまな工夫をしてくださりました。

例えばあるシーンでは、皆と同じではなく自分のタイミングで動き始めていい。一応音楽もありますが、ゆっくり動き始めるなど自由に。あと、ルールやタイミングは決まってるけど、どう動くかは子どもにゆだねたり。



子どもたち自ら進んで消毒を行う (撮影: 羽鳥直志)



熱中症に気を付けながら、ワークショップ中はマスクを着用 (撮影: 羽鳥直志)



お互いに距離を取りながら練習を行う (撮影: 羽鳥直志)

こういう時だからこそ「個」の力というか、自分の意志でそこに立ち、踊るということに挑戦できました。自分で考えることの面白さですね。

皆と同じじゃなくていい、というのは学校生活とは異なる点です。

運動会など学校の表現活動は、決められた正解に向かって取り組み、練習も本番も同じことができることを求められがちだと思います。でも、ワークショップは毎回同じじゃなくていいので、思いもよらない子がソロで踊ったり、本番で「え！そんなこと今までやったことないじゃん！」というようなことが起きたりします（笑）。

そこは学校の価値観とはズれるようで、学校でワークショップを行うと、完成形がいつまでも見えないので不安になる先生方が多いように思います。子どもは意外と大丈夫。大人の価値観を揺さぶる方が大変なのかもしれません。

答えや正解が分からないことを考えることも大切です。

全部正解が決まっていることしかできないように育つと、この先、どうやって生きていくんだろうと心配になります。世の中はイレギュラーなことが起きますから…。でも先生もそうしたいのではなく、今の教育システム上そうせざるを得ない面があるのだと思います。

アーティストは先生とは立場が違うので、子どもの前で困ったり失敗するところを見せられます。「じゃあ次はこっちをやってみよう」と、それが正解が分からないけど、その場で「いい」と思ったことを、子どもと一緒に考え、作っていきます。

“過程も学び”と。

今の子は失敗を避ける傾向にあります。「シーンを作ってみて」と言うと、まず周りの空気を読む。

そういう姿を見ていると、自分の想いを素直に出してみても大丈夫だよとか、正解は一つじゃないし、自分とは違う考え方をする人もいていいよねとか、もう少し緩やかにお互いを受け止められたら楽しいんじゃないかな、と思いますね。

特別支援学級や児童養護施設でも開催されています。

特に障害のある子どもたちに対しては、大人が先回りして動きがちですが、私たちが外から入ることで見えることもあります。

「こんな振付、あの子どもたちには難しくてできないのでは」と、先生は心配されていたけれど、やってみたら意外とできたとか、動き回らないようにいつも複数の先生が真後ろで待機していたけど、発表の時に大人がいない状態にすることもできたとか。

もちろん、その子ならではの“関わり方のコツ”もあるので、先生方のやり方を否定するつもりは全然なくて、意外とこっちでもいけるかも、みたいなことを意見交換できるのが理想だと思います。

最後に、メッセージをお願いします。

コロナ禍で制限がある中でも、一つの作品をつくりあげる時間を共有することで、人と繋がることの大切さや表現することの楽しさを味わうことが可能です。自分とは違う価値観の大人や子どもとの出会いは、かけがえのない何かを見つける時間になると思います。

9月以降の学校や施設でのワークショップは感染症対策を講じながら順次実施しています。私たち子どもたちが表現する場を作れるのであれば、ご相談しながら柔軟に進めていますので、ぜひ申し込んでいただけたら嬉しく思います。

取材・編集：加藤瑞子



自分で描いた地図を元に思い思いに歩く子どもたち  
(8月17日ワークショップ/撮影：羽鳥直志)



椅子を使い一定の距離を保つ  
(8月22日成果発表/撮影：羽鳥直志)



舞台上で自分らしさを表現  
(8月22日成果発表/撮影：羽鳥直志)

## プロフィール

中西 麻友 (なかにし・まゆ)

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち 事務局長。

1980年大阪生まれ。大学で写真を学び、2006～08年大阪市内の小学校に教諭として勤めた後、1年半のイギリス留学を経て2011年3月入局。ワークショップ・コーディネーターとして、学校（特別支援学級含む）や児童養護施設、障害児入所施設等での事業を担当。



THE FUTURE IS ART

## Interview Vol.4 前編

TURN 監修/アーティスト 日比野 克彦さん

アートプロジェクトTURNと自身のアートの可能性

# ひとりひとりのその人らしさを認め合うアートへ

2020/11/30 公開



TURN 監修/アーティスト 日比野克彦さん

## 言葉の定義に左右されず、幅広い意味を持ったTURN

障がいの有無や世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の“違い”を超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトとしてスタートしたTURN。

その監修を務めるのが日比野克彦さん。発足は、TURNという言葉を探し当てたところからだと言います。

「日本語で『生の芸術』と訳されるアール・ブリュットというフランス語があります。ブリュットという言葉は、加工されていないとか混ざりけがないというような意味で、専門的な芸術教育を受けていない人の作品のことを指します。

でも、日本では障がいを持った人の作品という印象が強い。アウトサイダーアートとも呼ばれていますが、どうしてもいろいろな情報に左右されてしまう印象が強かったです。」

ジャン・デュビュッフェが提唱したアール・ブリュットは、第二次大戦後のヨーロッパの前衛芸術思想の動きから生まれたひとつの潮流です。

「言葉の定義というのは難しい。例えば障がい者の施設に、芸術教育を受けた先生が行って指導のようなことをする。するとそこで生まれた作品は果たしてアール・ブリュットといえるのかどうか。そうした、定義が正しいのかどうかという話に左右されない言い方を探して見つけ出したのがTURNという言葉でした。

2014年に日本のアール・ブリュットの専門美術館4館の合同企画展覧会の総合監修を担当した際に、学芸員の方々とともに多くの時間をかけてコンセプトづくりをしました。そして、この名称を発信したわけです」

## ひとが、はじめからもっている力

合同企画展TURNには、「陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」というサブタイトルが付けられています。

「合同企画展『TURN』が開催される前に、日本海を80日間かけて小さな港に立ち寄りながら航海する「種は船」というプロジェクトがありました。その時に海からの視点というものを強く感じたんです。陸から見慣れているいつもの風景が、海から見ることで随分違って感じられたんですね。

もともと人類は海からの生命として誕生し、陸に上がることで今があるわけです。それを進化といわれますが、逆に失くしてしまったものもあるのではないかと。そんな発想がありました。そこで、TURNには、“陸から海へ”とともに“ひとがはじめからもっている力”というサブタイトルもつけました」

日比野さんのそうした思索は、ご自身の想いとも重なる部分があるのではないのでしょうか。

「僕も大学で美術教育を受けたわけですが、技術的な修練や伝統的な技法の継承といったことよりも、自分が思うままにつくりたい作品をつくるということとをずっとやってきたし、そうありたいと思ってやってきたわけです」

## 物質消費による満足感の時代を超えて

「僕がアート活動を始めた80年代というのは、西武やパルコ、伊勢丹などに代表される流通業を中心とした企業が斬新な広告展開などで注目を浴び、それぞれが美術館なども持つ時代でした。僕自身も1982年のパルコが主催する第3回日本グラフィック展で大賞を受賞しデビューしましたが、当時は感性の時代などとも言われ、若者文化の発信基地としての渋谷という街であったり公園通りなどが象徴的存在として機能していたと思います。

文学や音楽、演劇、美術などのカテゴリ化されたジャンルが交じり合っ、それぞれを横断するアーティストたちも登場し、次の新たな舞台を感じさせる表現が次々に起こってきた。多様性のはじまりの空気があった時代と言ってもいいのかもしれない」

しかしながら、それは一方で行き過ぎた消費社会の一因ともなったのではないかという面も露呈しました。

## 社会的な課題をアートが解決できるかもしれない

「80年代は別の意味では物質文明のピークとも言えるかもしれません。その次の90年代に入って、地球温暖化の深刻な問題が大きな注目を集めます。また、阪神淡路大震災などの自然災害に直面して、100年後あるいは1000年後の地球はどうなるのかというスケールで考えることに僕は直面したわけです」

その後、大きな時代の節目にあたる2000年に開催されたのが「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」です。新潟の棚田を利用したり、限界集落と呼ばれるような過疎の場所、高齢化が進む村などを舞台に“館を持たない美術館”として、その後3年ごとに催されています。また2010年には瀬戸内国際芸術祭が開かれました。

「これらの芸術祭というのは、その地域のなかで、限界集落、高齢化、少子化によってそれまで忘れ去られたような場所だったり、役に立たないとされてきた廃校、機能しなくなった施設や家屋、何気ない自然な風景に、アーティストが新たな価値観を取り入れることによって、そこにしかない力を引き出すことができるのではないだろうかという価値の変換が起こってきた。

人が訪れるようになり、なかにはそのまま移住して生活する人たちも出てきた。社会的な課題に対してアートによる解決ができる部分があるのではないかという糸口が見えてきたと思います」

そうした時代の変遷の中で、2014年に合同企画展TURNが催されたのです。

そのTURNが2020年に対峙することとなった重要な社会的課題が新型コロナウイルスの世界的な感染拡大とそれを防止しなければならないという行動や移動の制約でした。

後編では、その中で日比野さんが感じたTURNとご自身のアートのこれからをお話いただきます。

取材・編集：岡島朗

---

### TURNとは -

アーティストたちが、福祉施設や障がい者施設、社会的支援を必要とする人たち、コミュニティなどへ行き共働活動を重ねるTURN交流プログラムをはじめ、TURNの活動を日常的に行うための場所を地域とともにつくるTURN LANDの活動を軸としたアートプロジェクトです。また、展示やワークショップを行うTURNフェスや参加アーティストや各分野で活躍する専門家がTURNの可能性を語り合う場であるTURNミーティングなど様々な活動を行っています。

詳細はこちら <https://turn-project.com/about>



アートプロジェクトTURNと自身のアートの可能性

## ひとりひとりのその人らしさを認め合うアートへ

2020/12/11 公開

想像力によって過去・未来を見ることで  
現在を再定義する

80年代、それまで梱包材という認識だった段ボールを使って、それをアート作品として提示した作品が大きな話題を呼び鮮烈なデビューを果たした日比野克彦さん。

東京藝術大学にて教鞭を取りながら、社会的な課題解決をアートプロジェクトによって行うという芸術祭の総合監修やプロデューサーとしても活躍し、現在のTURNの出発点であるアール・ブリュットの専門美術館の合同企画展などを行うなど精力的に活動されてきました。

そのような中でTURNのプロジェクトは、スタート時から交流や出会いを大切な要素としてきましたが、2020年の新型コロナウイルスの感染拡大やそれを防止するための緊急事態宣言によって、その活動が大きく制約されることになりました。

「アーティストたちが、実際に障がい者の方々の方々の施設に行って、そこの人々とそこで感じたことを発信する“交流”という行為がTURNの主軸のひとつとしてありました。それがコロナ禍ではできなくなってしまった。ただ、テクノロジーの力を使うことによって、オンラインでの交流というものができるようになったということも、コロナ禍における発見でもあるわけです。距離という物理的な障壁が、障壁ではなくなる。移動が叶わなくても、交流が可能になるという新しい世界ができた。そこに可能性を感じます」



TURN 監修/アーティスト 日比野克彦さん

TURNフェス3 《光の広場》  
撮影：伊藤友二TURN交流プログラム  
(岩田とも子 × 特別養護老人ホームグランアークみづほ)  
撮影：富田了平TURN LAND (クラフト工房 La Mano)  
撮影：富田了平

## 会えない距離を超える想像の力

会えなくなることで、それまでの対面や実際に触れ合うことの意味も改めて認識することができるのではないか、と日比野さんは考えています。

「ラブソングの歌詞ではありませんが、会えない時間で育てられるものもある(笑)。人間にはイマジネーションがあります。会えないからこそ、あの人は今ごろどうしているかを想像する。会うことを楽しんでいる人たちばかりではなく、いままで実は我慢して会っていたということもあるのではないか、と。選択肢が増えることで、会うことの意味を新たに考えるという大きなきっかけというのは、まさにTURNの目的とも符合するのではないか。

今・現在という見えるものと今までやこれからという見えないものの両方が交流する。僕らは、そうした新しい“船”を発明して、これまで知らなかった大陸を探するという価値観を手に入れようとしているのかもしれない」

## すべての基盤にアートがある

2015年からTURNは東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムの先導的役割を果たす、東京都のリーディング・プロジェクトの1つとして新たに始動し、2017年より東京2020公認文化オリンピックアードとなりました。いろんな場所に行って交流するこれまでのTURNのプログラムは、オンラインに切り替えることで可能なものから少しずつ実施されています。また、TURN JOURNALという冊子を発行し、活動報告などにもTURNのフィロソフィーを様々な角度から伝える活動も行っています。その「TURN JOURNAL SUMMER 2020-ISSUE04」(<https://turn-project.com/timeline/output/10448>)において、日比野さんは絵画作品の発表とともに“アートのX”というエッセイを寄稿しています。その言葉の意味を問われると、日比野さんは、「言葉というのは便利なものではありませんが…」と前置きした上で、次のように続けます。

「言葉は、一方で制約も受けますね。例えば、赤い色と言っても、人それぞれの頭の中に浮かぶ“赤”は、決して同じではない。バラのような赤を思い浮かべる人もいれば、夕陽のような赤を思い浮かべる人もいます。言葉はとても便利なんですけど、かえって言葉が制限を加えてしまうケースもあるわけです。

では、アートという言葉を使ったときに人々はどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。絵画や彫刻作品を想像する人もいるだろうし、作品を鑑賞する行為のことを思うかもしれない。感性のようなことを考えるかもしれない。

例えば学校のなかでも、図工の時間だけがアートなのか。算数の時間に見た美しい数式にアートを感じたり、国語の時間に出会った美しい言葉にアートを感ずることも実際にありますよね。

僕は、すべての人々の生活の基盤の中にアートがあると思っています。多様性のある社会を築いていくためには、ひとりひとりの違いという個性を受け入れ合うことができるアートの特性がとても有効なのではと考えます。いろいろなものの中にすでにアートは存在しているという意味で“アートのX”という言葉を使ってみました



日比野克彦『アートのX』2020年「TURN JOURNAL SUMMER 2020-ISSUE04」掲載

すべての中にアートはあるという思想を、日比野さんは大学のプログラムにおいても実践されています。

## ピッチの選手と同様に、走りながら考える姿勢

「国連が人間及び地球の持続可能な繁栄のための行動指針として提示したSDGs (Sustainable Development Goals) が注目を集めていますが、SDGsが提唱する17のゴールにはアートというフレーズはありません。

でもそれは17のゴールすべてとアートが接続することができるということだと思っています。企業の姿勢や意識とアートを結びつけることで、アートもSDGsに貢献することができるのではないかと。東京藝大でもSDGsに貢献するプログラムがいろいろ動き出しています」

TURNのスタート時を振り返ったときに、「この活動がどのように受け取られるかわからないけど、まずはやってみようと思った」と言う日比野さん。そういう“走りながら、考える”姿勢は、日比野さんが大好きなサッカーにも通じているのかもしれない。公益財団法人日本サッカー協会(JFA)の理事も務められています。

「サッカーというスポーツも社会に貢献することが必要。東京藝大もJFAと連携して社会貢献活動を推進する連携協定も結んでいます。地域、行政、教育機関、スポーツ、そしてアートが連携することで、これからの社会課題に対する解決方法を探る大きなきっかけとなること。まさにそれはTURNという言葉に込めた気持ちでもあるわけです」

取材・編集：岡島朗

### プロフィール

日比野 克彦 (ひびの・かつひこ)

アーティスト、東京藝術大学美術学部・美術学部先端芸術表現科教授。岐阜県美術館館長。日本サッカー協会理事・社会貢献委員会委員長。1958年岐阜県生まれ。1982年日本グラフィック展大賞受賞。1986年シドニービエンナーレ参加。1995年ベネチアビエンナーレ参加。2003年より越後妻有アートトリエンナーレ参加。2010年より瀬戸内国際芸術祭参加。2013～15年六本木アートナイト、アーティストティックディレクター。2015年平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。2014年より、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展 2014-2015「TURN / 陸から海へ(ひとがはじめから持っている力)」を監修。2015年度より、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクト「TURN」の監修を務める。



THE FUTURE IS ART

## Interview Vol.5

Shibuya StreetDance Week 2020 アンバサダー/アーティスト 三浦 大知さん

# 制限があるからこそ生まれる

# 自由なクリエイティビティ

2020/12/25 公開



Shibuya StreetDance Week 2020 アンバサダー/アーティスト 三浦大知さん

## それぞれが決めた人生のチョイスを尊重し、認め合いたい

幅広い層に支持される新しい芸術文化としてのストリートダンスの確立とストリートダンサーの聖地である渋谷から世界へ良質なエンターテインメントを発信することを目的に、2015年からスタートしたShibuya StreetDance Week (以下、SSDW)。

2020年11月1日から7日まで開催された今年は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点より、従来の代々木公園等での開催を見送り、オンラインでの実施となりました。

今回、アンバサダーとして参加したのが、アーティスト・エンターテイナーとして多くの支持を集める三浦大知さんです。

三浦さんに、SSDW2020を振り返っていただくとともに、2020年のご自身の活動を通して感じたことをお聞きました。

「今回は、アンバサダーとして、またテーマソングの『Yours』という楽曲を通じて、SSDW2020に参加させていただきました。『Yours』は、まさに今年のコロナ禍で、自分の中から生まれたメッセージを込めて制作した楽曲です。ですから、この楽曲を通じて、ダンスでみんなとつながることができたのはとても嬉しかったです」

では、その『Yours』に込めた想いとは…。

「今年は、特に新型コロナウイルスの感染拡大が起きて、人生というのは本当に先が読めないし、何が起るか分からないということを実感しました。みんなもそうだと思います。そういう人生の中で、何かを決めていくのは自分自身です。それぞれの人たちが自分自身で決めたチョイスを、お互いに尊重し合いたい。悩んだり、苦しんだりした結果のチョイスもあるかもしれない。だからこそ、そのチョイスを認め合えたらいいなと思いますし、そうできたら素敵なことだというふうに思ったんです」

## 込めた想いは、必ず伝わる

今回、SSDW2020テーマソング『Yours』に合わせた様々なパフォーマンス投稿動画をつないで、ひとつの映像作品として結実させる『ONLINE DANCE WITH music』という企画も実施されました。



SSDW2020 「ONLINE DANCE WITH music」

「本当にたくさんの方々からの投稿をいただき、それが自分の楽曲を通じてダンスでつながれるのはとても幸せだなと感じました。みなさんの込めたものがしっかりと作品になることを心がけました。みんなそれぞれの人生を踊っています。それぞれの場所でもがいたりもしているかもしれない。そこでは独りなんだけど、そうやって独りで踊る人たちがたくさんいることによってつながることもできるんです。出来上がった映像作品を見て、この楽曲の新しい可能性が広がったのかもしれないと思いました」

今年予定されていたライブにも大きな影響があり、映像に想いを込めるということは、三浦さん自身もオンラインライブを通して感じたこととも共鳴しているようです。

「これまでやってきた観客のみなさんと作り上げるライブとは違って、レンズの向こうにいる人たちのことを想像することで生まれるエモーショナルな想いを込めるというのがオンラインライブなんだろうと思います。そこに挑戦できたことで、ライブの形態はまったく違うコンテンツではありますが、オンラインだから伝わらないということはないんだという発見を得たことはとても大きかったです」

## 工夫やアイデアで、想像したものを超える

そうした発見に至る過程には、三浦さんのクリエイティビティに対する想いがありました。

「もちろん今年起こったコロナウイルスの感染拡大は、大きなことです。でも、クリエイティビティということ言えば…」と言葉をつなぎます。

「何もかも自由にできる状況じゃないほうが圧倒的に多いですよ。だからこそ、工夫やアイデアで、想像したものを超える楽しみがある。例えば、ライブにおいて物理的に無理なことはたくさんあります。でも実際の演出として、こうしたらより伝えたかったことが届くのではないかと考えるのが楽しい。うまくいかないことにたくさん向き合っても、でも最終的には“これ”が生まれるためだったんだということを楽しめたらいいなといつも思っています。だからオンラインライブにおいても、実際の会場では共有できなかったけれど、届けたいという強い想いの感覚をシェアし続ければ、本当に会場にいるような気持ちでつながれるんだと思います」

## ダンス表現は常にチョイスの連続

お互いのアイデアや可能性のチョイスを尊重したいという『Yours』に込めた想いはダンスにも通じているようです。

「ダンスという表現方法は、ひとつしか正解がないものではありません。例えば、多彩なステップを踏む表現も、逆に一切動かずに止まって一つの音だけをひらって瞬間的な動きで表現することも、どちらもその音に対する正解かもしれないし、それは時々によって違うものです。楽曲と世界観の解釈から、表現したいことの中で常にチョイスし続けるんです」

## 好きだからこそ、考え続けられる

楽曲とダンスを通じて表現したい人たちに向けてのメッセージとは？

「誰かのためじゃなくて、自分のために踊ってほしいです。だからこそ思いっきり楽しんでほしい。楽しまないと続きませんから(笑)。それはダンスだけじゃないですね。うまくいなくて落ち込むことは決して悪いことじゃない。だから楽しめたもの勝ちです。もし楽しむ秘訣があるとすれば、それは考えること。考えることと悩むことは近いけれど、ダメだったら、“じゃあ、どうしたらうまくいくか”を考えることで指一本でも前に行けると思います。好きだからこそ、きっと考え続けられるんですよ」

今の時代に生きる特に若い人たちは、とても柔軟。SNSなどをうまく使って、楽しみながらたくましく乗り切るアイデアをたくさん持っていると思いますね」

取材・編集：岡島朗



SSDW2020「ONLINE DANCE WITH music」の様様



SSDW2020「ONLINE DANCE WITH music」の様様

### プロフィール

三浦 大知 (みうら・だいち)

1987年8月24日生まれ、沖縄県出身。Folderのメインボーカルとして1997年にデビュー。

2005年3月にシングル「Keep It Goin' On」でソロ・デビュー。天性の歌声とリズム感、抜群の歌唱力と世界水準のダンスで人々を魅了し、コレオグラフィやソングライティング、楽器も操るスーパーエンターテイナー。2012年に日本武道館、2013年に横浜アリーナ、2017年には国立代々木競技場第一体育館にて単独公演を大成功させ、ライブの規模も年々拡大させている。2020年11月11日ニューシングル「Antelope」(アンテロープ)をリリース。カップリングには6月にデジタルリリースし、8月Choreo VideoをYouTubeで公開した楽曲「Yours」(SSDW2020テーマソング)、「Not Today」を収録。



# 「オンライン能」で日本語の力強さや言霊、 そして“香りたつ品格”を感じていただけたら。

2021/01/29 公開



能楽師 友枝雄人さん（撮影：福岡海）

通常のように客席からではなく、舞台の上で能を鑑賞する、そう聞いてどのような映像をイメージするでしょうか？ 国内外に向けて発信された「オンライン能」は、能舞台の上にカメラを入れて迫力ある撮影を行い、英語の字幕も付いています。この画期的な映像作品の提案者でもある能楽師の友枝雄人氏に、企画に込めた思いや、2020年のコロナ禍における舞台活動への影響などを伺いました。

## なかなか大変そうだな、と思っていたら2020年の予定が、まるまる延期に。

2020年の1月に新型コロナウイルスが確認され、世界的に感染拡大する中で、自粛期間なども経てきました。

友枝さんご自身にはどのような影響がありましたか？

まず、2月くらいからなんとなく舞台にも影響が出るのかもと感じ、実際3月くらいから舞台公演が止まりはじめ、年度が終わるころには夏先までの公演がどんどん中止や延期になりました。

それから自粛期間になって、まず感じたことをひとことと言えば「こんなに世の中って止まってしまうんだな」と。

今までにない経験でしたから、それはもういろいろなことを考えました。

舞台活動というものが止まるということが今までありませんでしたから、あらためて舞台に立つ、能を舞うということに自分なりに向き合い、結果的には潤沢に自分の時間ができたので、ある意味、研鑽の時間にもなりました。

## 自粛期間中は、約1時間かけて稽古場へ徒歩で通っていました。

お稽古にも変化はありましたか？

これまでは公演に向けていい舞台を作るための稽古がほとんどでしたけれど、それとは違う表現者としての向き合い方、時間の使い方になりましたね。

あと、自粛期間は公共交通機関を避けていたので、自宅から稽古場まで毎日約1時間かけて歩いて通っていました。都内を散策しながらというか、知らない道に迷い込んだり、ぼっかりと景色が開くように「ああ、こんなところに神社があったのか」というような発見があったり……。

そんな風に過ごす時間にもいろいろ考えるもので、こういう経験は私だけではなく2020年を生きている人には平等に訪れているわけです。

なので、まず思ったのは、マイナスになりがちですけど、プラスに変える方向にしないといけないな、そのためには何をすればいいか、ということはすごく思っていました。



(撮影：福岡海)

## たとえば野球を家のテレビで観戦するイメージに近いでしょうか。

そういった時間を過ごす中で「オンライン能」をやろうと思いつかれたのでしょうか？

実は、以前から映像配信をしたいとは考えていたんです。でも、舞台活動を行っていた中では、なかなか時間がなく、先送りになっていました。それで今回、新型コロナウイルスのことがあり、海外の方も来られなくなった状況の中で、アーツカウンシル東京の方々とも「今こそ日本の文化を海外に向けて発信しよう」という話になりまして……。

以前から私がイメージしていたことは、たとえば野球観戦ですと、球場に行ってお観戦するのと、家のテレビで観る2つのスタイルがありますよね？実際に球場に行くと目の前で同じ人間とは思えないような速い球を投げて、それを打ってホームランにしゃうわけで、その臨場感や迫力は生観戦でしか得られないものだと思うんです。

一方、家のテレビで観戦すると、球種まで分かったり、選手の表情も見えたり、解説者が分かりやすく説明までしてくれて、さらにはリプレイやスローモーションなんかも見られて、そうすると技術の高さがより分ったりもするわけです。

「オンライン能」は、この後者に近い感覚とも言えるでしょうか。

たとえば能が大好きで最前列で観てくださる方へも客席からはどうしても観られない部分を映像で撮って、尚且つ編集することで能の新たな見方を提案できるのではないかと。

もちろん今までもテレビで能の舞台は放映されてますが、それとは違ってもっと距離が近いものにしたくて、今回は舞台の上にもカメラを入れて撮影しました。結果、今までの能舞台の放映番組とは違う迫力を感じていただける、映像作品として完成度の高いものになったと思っています。

## 演目に「船弁慶」を選んだ理由は、分かりやすさとダイナミックさ。

舞台の上にはカメラが入るのは珍しいことですか？

そうですね。今まで舞台の宣伝用のダイジェスト動画を舞台の上で撮影したり、というようなことはありましたけど、一時間強、一曲の能を通して撮るといのは(私は)初めてですね。映像は残るものですので演者としては確かな技術がないとみっともないことになりますから相当な覚悟がないとできません。それと同時に動きのダイナミズムがないと映像として飽きられてしまう可能性もあると考えました。

「オンライン能」を実施するにあたり、能を初めて観る方でも楽しんでもらえる演目がいいと思いまして、「船弁慶」にしました。「船弁慶」は薙刀(なぎなた)も使いますし、動きもダイナミックで内容的にも分かりやすいと思いますし、何より昔から人気が高い演目です。

能は「難しい」とか「敷居が高い」とか思われがちですけどそんなことはなく、現代や日常と繋がっているという点も見てくださいですね。

そのあたりは映像監督とも話をしました。



オンライン能『船弁慶』

## 洋服で舞っている姿も映像に含まれています。

映像監督の方とは長い付き合いなのですか？

5～6年ですね。大槻聖志さんという方で、毎回ちょっと驚くような要望をされるんですけど(笑)、出来上がった映像を観るとこちらの意図を汲み取ってくれていることが分かるんです。

今回も「洋服を着て舞って」という注文があり、実際に撮影したんですけど、約700年もの歴史がある能を現代人が芸術性を持って舞っているというところにフォーカスしているんでしょうね。ぜひそのあたりにも注目していただきたいです。

## 選び抜かれた言葉の繋がり。その中で生まれるもの。

それはぜひ観たいです。では、能を初めて観る方や外国の方に向けて能の楽しみ方のアドバイスなどありますでしょうか。

まずは、観たまま、感じたまま、第一印象を大事にしてください。

観て、そして聴いているうちに独特な言葉選びに気づくと思います。能は、言葉というか“言霊(ことだま)”を大切にしまして、選び抜かれた言葉の繋がり、言霊、声、お囀りの音、掛け声、そういったいろいろなものが折り重なって、それが結果として音楽になっているものなのです。

言葉を大切にしているという点で、今回は日本文学を翻訳なさっている専門の方に字幕をお願いしています。英語圏の方にとっても日常ではなかなか使わない単語も多いと思いますし、言語を超えるということは難しいことですが、いろいろな方のお力を得て、言葉の意味や響きが伝わるように工夫しています。

ですので、その言葉の中になんというか“香りたつ気品”があると思うので、映像と共に感じていただけたら、この上ないよこびです。

## 粛々と乗り越えながら 新しい場所へ行きたいと思っています。

“香りたつ気品”、美しい表現ですね。では、舞台芸術に関わるお立場として今後の舞台活動をどのようにお考えですか。

まず能は前述したとおり、約700年続いてきました。

時代が変わっていった中で長い間残ってきたのは「残っちゃった」のではなく「残してきた」のだと思うんです。だから今、さまざまなことに直面しているけれど、500年前、600年前に生きていた方々もそれぞれそれなりに直面してきたはず。なので私たちも同じように粛々と乗り越えて何もなかったかのように伝えていけたら。

伝わるものとは、そうやって淡々としていればいいと思っています。

とはいえ、今までになかった緊張感も実際ありまして、それは逆にいうと与えられた課題みたいなもので、乗り越える価値のあるものだとも思っているんです。

そういう意味で試行錯誤は続けていきたいですし、先を読んだり、いろいろしていく上で判断を誤ることもあるかもしれない。でもそれも含めて模索したり試行錯誤したりすることに生活の価値を見出せばいいですね。舞台に関わっている立場に限らず、みなさん一緒だと思っています。

人類がどこまで続くのか分かりませんが、700年ずっと続いてきたものを私の世代で、新型コロナがあったからってトーンダウンさせては絶対にいけない。それはあってはならないことだと思っています。

## いつの日かぜひ舞台を観に来てください。「オンライン能」がそのきっかけになれば。

最後に動画を楽しみになさっているみなさまにメッセージがあればお願いします。

舞台というのは、平和でなければ成り立たないし、表現するものとしては、その表現を観て感じてくださる方々がいないと成り立たないわけです。まだまだ危険と隣り合わせになりながら日常を少しでも取り戻そうとしている段階ですけど、そういう状況において「オンライン能」の映像が、少しでもほっとできるお役に立てばうれしいです。

そして、能のおもしろさを感じていただけたら、ぜひ舞台にもいらしてください。やはり生の人間が目の前で演じている、それを観ていただきたいので。映像もいいですけど、舞台もぜひ観ていただき、日本の伝統芸能の本質に触れていただきたいですね。「オンライン能」が、そのきっかけになれば本当にうれしいです。

取材・編集：東美津子



(撮影：福岡海)

### プロフィール

友枝 雄人 (ともえだ・たけひと)

1967年 東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。故友枝喜久夫の孫。伯父友枝昭世の養子となる。喜多流十五世宗家故喜多実入門、友枝昭世に師事。1970年 初舞台「鞍馬天狗」花見、1977年「経政」にて初シテ。1994年「狸々乱」、2002年「道成寺」、2005年「石橋(赤獅子)」、2010年「翁」を抜く。「五蘊会」主宰。「観ノ会」参与。2009年 小学館白洲賞受賞。公益社団法人能楽協会会員。一般社団法人日本能楽会会員。重要無形文化財保持者(総合認定)。



コロナ禍で得た、芸術鑑賞の意味を再認識する機会

「アートを見る」とは、自分を見ること。

2021/01/29 公開

2020年6月9日から9月27日まで、東京都現代美術館で開催された『オラファー・エリアソン ときに川は橋となる』。同展は、アイスランド系デンマーク人作家、オラファー・エリアソン氏の、日本での開催は10年ぶりとなる個展。気候変動や地球環境がテーマに掲げられ、好評のうちに幕を閉じました。

当初の開催予定は3月でしたが、新型コロナウイルス感染拡大により約3カ月延期に。海外の作家が来日できない状況下で、どのように準備が進められたのか。この展覧会を企画したキュレーターであり、東京都現代美術館参事の長谷川祐子さんに伺いました。



Portrait of Olafur Eliasson

Photo: Brigitte Lacombe, 2016 © 2016 Olafur Eliasson

オラファー・エリアソン 1967年、コペンハーゲン（デンマーク）生まれ。光や水、霧などの自然現象を新しい知覚体験として屋内外に再現する作品を数多く手がける。近年は気候変動など社会的課題をめぐる取り組みにも力を注いでいる。



東京都現代美術館参事 長谷川祐子さん

## 功を奏した要因は、テーマ性と作家との信頼関係

多くの来場者が訪れた同展は、エコロジーについて五感で体験しながら、自分と地球環境に思いを巡らせることができる仕組みに。この構成は、長谷川さんとエリアソン氏とで考えたもの。

「エリアソンが『サステナビリティ』をテーマに個展を開くのは今回が初めてです。日本では東日本大震災を体験し、自然と人間の関係を考え直すエコロジーと深い関わりがあるので、東京開催ならそこを意識した展覧会に、と。

彼は国連の文化親善大使として、環境問題について発信しています。それは、自身の第二の故郷・アイスランドの氷河が溶けている様子を、定点観測で20年以上にわたり撮影し、地球環境の危機を身をもって実感しているからです」



オラファー・エリアソン 《太陽の中心への探査》2017年

「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景（東京都現代美術館、2020年）撮影：福永一夫  
「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」は、観覧者の目の前に虹を再現するなどの体験型作品や、空間全体を作品として体験できる大規模なインスタレーション、サステナビリティをテーマにした作品など、代表作と新作で構成された。



オラファー・エリアソン 《溶ける氷河のシリーズ 1999/2019》2019年

「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景（東京都現代美術館、2020年）撮影：福永一夫  
エリアソン氏は幼少期に過ごしたアイスランドの自然を、20年以上にわたり撮影し続けてきた。

今回は準備段階においてもサステナビリティが考慮され、作品の輸送は飛行機を使わず、シベリア鉄道と船でほぼ1カ月かけて搬送。輸送期間と会場での設置期間から逆算し、当初の開催予定日のかなり前には日本に到着していました。

「1月、2月はまだコロナの状況が分からない段階で、予定どおり設置し準備を進めました。作家は最終チェックで3日前に来る予定で組んでいたのですが、ギリギリまで、何とか来日できないかと思っていましたが……叶いませんでした。

ですので、開催延期が決まった時には既に展示は完成していたんです。そのまま開館できる日を待つ状態が続くわけですが、今回は幸いなことに作家のスタジオから来たものが大半で、他のレンダーからのローン(借用)が少なかったのが、丸々3カ月ズレても展覧会を維持できました。

サステナビリティがテーマですので、あまりいろいろなものを運ばず、元々現地制作や“地産”の素材を使うことを考えていました。作家から素材調達も含めて詳細な指示をもらい、それに従って東京で作るという方針。全てが輸送だったらいろいろな問題があったと思いますが、このテーマだったことが、うまく作用しました」

ある程度までの準備を東京で行うのは予定されていたことですが、作家による“最終チェック”ができない、という想定外の状況に。特に苦勞したのが、今回の展覧会特有の“不定形な展示”だといいます。

「日本で1日の作業が終わる夕方5時以降が、ベルリンのエリアソンが起きだす時間。ディスプレイ業者さんにも残っていただき、作家に見せて指示を受け、次の日に反映するというスタイルで進めました。

作家とはスカイプをつなぎっぱなしにしてiPadで見せますが、水のゆらぎ、光や露などは不定形で現象的なもの。とても大きな500㎡のアトリウムを使った展示などは、空間全体の様子をiPadで伝えることは不可能に近い。しかも新作なので、作家自身もその場所でどう見えるか想像がつかないわけです。

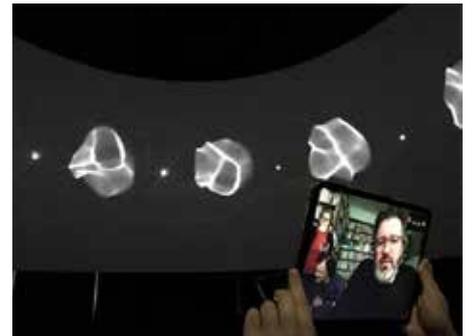
例えば“波紋が壁一面に映る”状態は、どれくらいの時間揺らすかによって、波の立ち方や次の波が来るテンポが変わってくる。波の表面だけではなく全体の効果は、その場にいないと分かりません。

作り上げた効果をよしとするかどうか。オンラインでのコミュニケーションで補いながら調整していくのは本当に大変でした。

ただ、新作であっても彼の方法論や言語は大体分かっていたので、最後は、彼の作品を長年見てきた私の判断を信用していただくしかない。『あなたはここにいないんだから、私に任せて』と言うしかなかったですね(笑)。

幸いなことに施工もエリアソンと仕事をした経験のある会社でした。私も含め、作家と築いてきた信頼関係、経験があったからこそできたと思います。

他の作家もエリアソンのようにリモートでうまく展示できるという保証はありませんから、新型コロナウイルスにより海外の作家が来日できないことで、今後、国際展は制約されてくると思います」



スカイプを通して展示を見せながら、ドイツのエリアソン氏から指示を受ける様子



オラファー・エリアソン 《ときに川は橋となる》2020年  
「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景（東京都現代美術館、2020年）  
撮影：福永一夫  
水面に反射するスポットライトの光が、頭上のスクリーンに映し出される。



オラファー・エリアソン 《ビューティー》1993年  
「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景（東京都現代美術館、2020年）  
撮影：福永一夫  
暗闇の中、観覧者の前に虹が再現される。

## “今、できること” から見えた、オンラインの可能性とアートの使命

展覧会の開催を待つ間、4月24日には、ベルリンのエリアソン氏と長谷川さんとのオンライン対談が行われました。ライゾマティクス (以下、ライゾマ) が主催するオンラインイベント「Staying TOKYO」での企画です。

「オラファースタジオのスタッフも、全員自宅待機の時期。アーティストは何かできるかを考え、私もキュレーターとして何かできるか考えていましたので、お互い本音でディスカッションしました。

美術館でのレクチャーなら参加できるのは200人ほど。オンラインでは海外の方も含め約2000人がライブで視聴され、大きな可能性を感じました。と同時に、それをすぐに始めたライゾマの人たちはスゴいな、と思いましたね」

対談から約1カ月後には緊急事態宣言が解除され、無事に展覧会が開催されましたが「コロナ禍での運営面における課題が見えた」と長谷川さん。

「今までの大量動員型での鑑賞は、企画の立て方から考え直す必要があると感じました。美術館としては収益を考えると来場者数が必要ですが、安全第一での開催となると赤字覚悟でやらざるを得ません。オペレーションについては、各美術館のスタッフ、キュレーターなどが総合的に判断するしかなく定式はないと思います。今回の展覧会では、展示室内のお客様の数をコントロールしました。

また、特に公立美術館においては、教育普及プログラムの問題があります。今回はシステムが間に合わず、オンラインで本来の役割が適切に果たせませんでした。今後、教育普及や情報をどういった形でオンラインでシェアするか、仕組みを考える必要があると思います。

ただ、今回はカタログを展覧会の開催前から販売し、2回増刷するほどの人気でした。例えば、東京の展覧会にいらっしゃることができない方にも、映像も含めた別の媒体も併用しながら展覧会の内容をご理解いただけるのでは、という可能性を感じました」

コロナ禍においてドイツ政府は「アーティストは今、生命維持に必要な不可欠な存在」と表現しました。長谷川さんは、日本においても“アート鑑賞の意味”について多くの人が考える機会になったのでは、と感じているそう。

「今回、家族連れや若い方がものすごく多かったです。コロナ禍でフィジカルな体験ができず人間として非常にストレスが多い状況の中、ここでは自分のシャドーで遊んだり、虹の中に入ったり、自分の身体が作品と一緒にになれる。エリアソンの言葉で言うところの『あなたと作品の共同制作』です。画面越しとは違う、五感で体験することで生まれる喜びからか、特に若い方たちが、今まで私が見たことがないくらい長い時間を展示室で過ごされ、真剣に向き合ってくださっているのが印象的でした。

今回、感想で多かったのは『順番に鑑賞し五感で体験していく中で、地球環境について“私の問題だ”と実感できた』という声でした。ニュースなどで見聞きするのは明らかに違う。これこそが、アートのチカラだと思います。



オンラインイベント「Staying TOKYO」での長谷川さんとエリアソン氏  
<https://www.youtube.com/watch?v=B8snYcVEREQ&feature=youtu.be>



オラファール・エリアソン 《クリティカルゾーンの記憶 (ドイツーポーランドーロシアー中国ー日本) no.1-12》2020年  
「オラファール・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景 (東京都現代美術館、2020年) 撮影：福永一夫  
鉄道と船で運ばれた際の振動で描き出された作品。



オラファール・エリアソン 《サンライト・グラフィティ》2012年  
「オラファール・エリアソン ときに川は橋となる」展示風景 (東京都現代美術館、2020年) 撮影：福永一夫  
携帯式のソーラーライト「リトルサン」を使った参加型の作品。  
※「リトルサン」はエリアソン氏とエンジニアのフレデリック・オッセン氏が共同開発したライト。世界各地の電力のない地域に届けるプロジェクトが実施されている。

行動が制限された時、人間は非常に内省的になり自分と向き合います。芸術作品を見るということは、自分を見るということ。自分のメンタルなもの、あるいは想像力とか思考力。アートがどういう環境をつくり、自分たちの精神にどういう作用があるのか。コロナ禍で人間性を維持しバランスをとるために重要なものであると、アート鑑賞の意味を皆さんに再認識していただけたなら、非常に素晴らしいことだと思います。

その機会として、ぜひ地元の美術館や資料館なども使っていただければと思います。私もコロナ禍で地域の美術館を訪れました。それらは、皆さんの資産です。作家も作品も移動しづらい時ですから、地域の美術館が所蔵するコレクション、資産をいかなる形で活用するか、見直していくことが大切だと思います。

## 半歩先を見せていくのが美術館の役割

長谷川さんが次に企画しているのは、オンラインとオフラインを合わせたハイブリッドでのライゾマの個展『ライゾマティクス\_マルチプレックス』。

「何もかも今後の状況次第ですが、先が見えない時は選択肢があった方がいい。そこでオンラインとオフラインのハイブリッドというのは、いろいろな意味で今の状況を切り抜けていく一つのアイデアだと思います。

現状を憂えるだけでなく、今だからできる新しい試みを、非常にポジティブに試行錯誤してみようということになりました。

彼らは私たちの身边で起こっているさまざまな問題や知覚を超えた現象をリアルに感じられるよう、視覚的に美しくデザインする。とても印象に残る方法です。ビジュアライゼーションするチカラというのは、アーティストの新しい使命の一つ。それを非常に巧みな形で行っています。

ライゾマには、今まで私が海外で企画した展覧会に参加してもらうことが多かったのですが、今回は日本で一緒にやっていただけるということで、とても楽しみにしています。

### ■『ライゾマティクス\_マルチプレックス』

会期：2021年3月20日(土・祝) - 6月20日(日)

会場：東京都現代美術館 企画展示室 地下2F

<https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/rhizomatiks/>



Rhizomatiks Research x ELEVENPLAY x Kyle McDonald  
(discrete figures Special Edition)  
2019年10月6日 札幌文化芸術劇場 hitaru  
主催：札幌文化芸術劇場 hitaru (札幌市芸術文化財団)・  
ライゾマティクス © kenzo kosuge [参考図版]



「Fencing Visualized Project」2013年～  
H.I.H. Prince Takamado Trophy JAL Presents Fencing World  
Cup 2019  
ライゾマティクス\_マルチプレックス展 [参考図版]



Squarepusher 《Terminal Slam》2020年  
[参考図版]

美術館には、常に半歩先をお見せするという役割もあります。アーティストの新鮮な視点を通して視覚化していくという重要な役割を、このタイミングで開催できるのは非常に面白いことだと思います。

また、現代美術館は東京都の美術館です。この国の、ある意味で文化の第一拠点。コロナ禍で開催したエリアソンのエコロジー、サステナビリティという展覧会に続いて、このライゾマの展覧会はオンラインでも視聴可能ですから、国内の方にも海外の方にも、ぜひ見ていただきたいですね。

取材・編集：加藤瑞子

### プロフィール

長谷川 祐子 (はせがわ・ゆうこ)

京都大学法学部卒業、東京藝術大学大学院修了。金沢21世紀美術館を立ち上げ、東京都現代美術館参事を経て、2021年4月から金沢21世紀美術館館長就任。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授。イスタンブール・ビエンナーレアドバイザー委員。犬島「家プロジェクト」アーティストティックディレクター。

最近の展覧会は「第7回モスクワ現代美術国際ビエンナーレ：Clouds ⇄ Forests」(モスクワ 新トレチャコフ・ギャラリー、2017～18)、「Japanorama: NEW VISION ON ART SINCE 1970」(ボンビッドゥセンター・メッス、フランス、2017～18)、フランス・アリス個展「La Depense」(上海ロックバンド美術館、2018)、「Sharjapan-The Poetics of Space」(シャルジャ芸術財団、2018)、「深みへー日本の美意識を求めてー」展(パリ ロスチャイルド館、2018)、「Intimate Distance: the masterpieces of the Ishikawa Collection」(モンベリエ・コンタンボラン、2019)、「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」(東京都現代美術館、2020)など。



## 社会が疲弊した時こそ、文化が必要

2021/02/26 公開

### 開館当時のミッション・構想は今も大きな意味を持っている

「江戸東京の歴史と文化の発信」を目的として1993年に開館した江戸東京博物館。都民はもとより、国内外から多くの観覧者を集める人気の博物館です。実物資料や精巧な模型を駆使した常設展、さまざまなテーマで企画する特別展、さらに学芸員の方々による“えどはくカルチャー”と呼ばれる講演会なども人気を博しています。80年代の基本構想時からこの江戸東京博物館に携わってこられた小林淳一副館長にお話を聞きました。

「80年代からスタートした博物館の基本構想、そこに掲げた理念は大きく変える必然性はないと思っています。館の理論的支柱は「江戸東京学」です。これは歴史、美術、民俗、芸能、建築など関連の学問分野を横断的、かつ学際的に展開することによって、この東京という地域をより深く、より広く究明していくというものです。このコンセプトは、現在も大きな意義をもっています」



江戸東京博物館副館長 小林淳一さん



江戸東京博物館の外観

「江戸東京博物館は所蔵品ゼロからのスタートでした。屏風や浮世絵、工芸品などの美術品をはじめ、その種類は多岐にわたります。しかし、とくに苦労したのは高度経済成長期の生活用品の収集でした。多くの都民からの寄贈を仰ぐわけですが、“もう10年早く来てくれたら、まだ残っていたのに”という言葉をよく聞きました。展示で必要としていたのは、実際の生活のなかで使っていた初期の電化製品や鍋・釜のたぐいです。そういったものは、一般の家庭はもとより、当時はメーカーでも保存していませんでしたから（笑）。高度経済成長期からバブル期にかけて、“消費は美德”とされていたような時代でした」

なかには清掃事務所の通報で、粗大ゴミから探し出した貴重な資料もあるとか。窮余の策ですね。そうして収集された膨大な所蔵品は、それぞれ個別にバーコードによる管理が徹底されており、貸出状況や修復のステイタスなども記録されているとのこと。そして、江戸東京博物館は2022年から大規模改修工事に入る計画があり、その後、リニューアルオープンを予定しています。

「江戸東京の歴史と文化の発信のために当館の基本方針を、資料・展示・教育・運営・研究・交流の6つの要素に設定しています。博物館は、学芸員や事務職をはじめ、さまざまなスタッフによって運営されています。自分たちの担当する仕事をそれぞれが再認識し、リニューアル後の事業計画に反映させていきます」

常設展の構成は、1603年の江戸開府から1868年の明治維新までの「江戸ゾーン」、それから現代に至る「東京ゾーン」の大きく2つから成っています。

「江戸ゾーンは共時的展開をしています。一方の東京ゾーンは通時的展開をとっています。江戸ゾーンは、江戸の都市計画、町の暮らし、出版と情報、江戸の商業ほか9つのテーマに添って構成しています。実物資料をはじめ、精確に再現した模型や実物資料などを使って江戸の様相が面として分かるように工夫しています。一方の東京ゾーンは、震災や戦災を経て東京という都市がどのように移り変わってきたか、庶民の生活の諸相について、明治・大正・昭和とその時代ごとに時間軸を追って表しています」

### 膨大な所蔵点数の収集の苦労と徹底した管理

所蔵する資料点数は、標本資料と図書などを含めて約62万という膨大な数。その収集には大変なご苦労があったとのこと。

## もう一度自分たちを見つめなおす

今回のコロナ禍と緊急事態宣言は、リニューアル後の博物館の姿にも影響があるのでしょうか。

「今回の新型コロナウイルスは、改めて自分たちの博物館の姿を見つめなおすきっかけになっています。当館だけでなく、世界中の多くの美術館・博物館もそうだと思います。ほんの一例ですが、これまでにあった入場までに2時間も待つような混雑きわまる展覧会のようなもの、よくブロックバスターといいますが、それはもうあまり望まれなくなるのではないのでしょうか。ただし、博物館・美術館がなくてもいいかというそれは違う。人間を人間たらしめるものは文化です。このように社会が疲弊している時にこそ、かえって博物館に求められるものは多く、また私たちはその社会的要請に応えていかなければなりません。新たな視点をもって、あらゆる事業の“質の向上”をさらに目指したいと考えます。2020年4月の緊急事態宣言のときには約2カ月間の臨時休館を余儀なくされましたが、その後再開した際、お越しいただいた観覧者がとても喜んでくれました。なかには、涙ぐんでいた方もおられました」



江戸東京博物館の内観

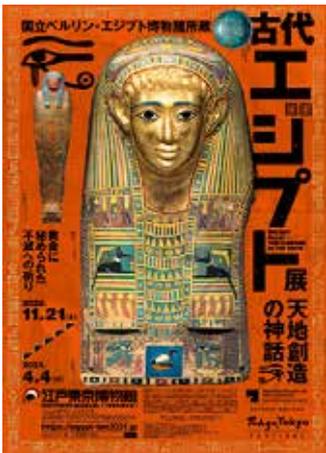
今後の江戸東京博物館にとって、挑戦となる、発信方法に関するプロジェクトにも着手していきます。

「2022年からのリニューアルのための工事休館時には、これまで収集した所蔵品のすべてのデジタル化を遂行する予定です。そうして再整理された所蔵品を、今後は世界の方々が検索して閲覧できるようにする予定です」

デジタルアーカイブによって、「この東京という地域をもっと深く掘り下げ、東京に暮らす私たちのアイデンティティを確かめるべく、より調査・研究できるようにする」と小林副館長は、大きな期待を寄せています。

## 海外との交流に関しても、より積極的に

自分たちの博物館を見つめなおすとともに、いま海外の博物館との交流にも積極的に取り組んでいます。2020-2021年にかけて行われている特別展『古代エジプト展 天地創造の神話』(2021年4月4日まで開催中)は、ドイツにある国立ベルリン・エジプト博物館の所蔵品による展覧会ですが、欧米をはじめ、カイロやソウル、北京など、東京都の友好姉妹都市の博物館とも深く交流を続けています。また国際博物館会議(ICOM)などを通じて、世界各国の都市の博物館どうしの交流をより積極的に進める提案も行っています。



特別展「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵  
古代エジプト展 天地創造の神話」  
会期：2020年11月21日(土)～  
2021年4月4日(日)  
会場：東京都江戸東京博物館 1階特別展示室

「自分たちの足元、江戸東京という地域をより深く掘り下げ、一方でその成果をこれまで以上に海外に向け積極的に発信していく。つまり双方向が大切になると考えます。

さて、このパンデミックの要因としてグローバリゼーションが挙げられていますが、各地の文化もグローバル化が進むと、大切な固有の文化がなおりにされることはないのでしょうか。そのメリット、デメリットを適格に認識することが肝要です。私たちができることは、博物館コレクションをとおした“異文化理解”にあると思います。そのためにも、デジタルアーカイブ化は有効なツールになります。それ以上に62万点に及ぶ実物資料『江戸博物館コレクション』の価値は重い。江戸東京の歴史と文化に対する関心はとても高いですから」

新型コロナウイルスの感染拡大や緊急事態宣言によって、博物館の運営も大きな課題を突き付けられました。インタビュー中、小林副館長は、コロナ禍での休館とその後の再開に関してだけでなく、リニューアルに際しての施策のひとつであるデジタルアーカイブについてのお話でも「もう一度自分たちの暮らしを見つめなおす」ということを仰います。江戸東京に住む人びとの日々の生活にフォーカスするこの江戸東京博物館の運営を通じて、日常のあり様を深く見てこられたからこそその言葉のようで印象的でした。最後に、今後の取り組みをお聞きすると、

「休館中は、リニューアル後の事業の準備をします。たとえば“移動博物館”などを検討しています。高齢者施設や小中学校、フリースクール、矯正施設ほか、学芸員たちが江戸東京博物館のコレクションを携え、いろいろな場所に出かけて行く。それから、子供たち自身の手でつくる企画展を行いたいと思っています。子供たちに実際に学芸員の仕事を体験してもらい、博物館活動の理解を広める。これ実はね、“欽ちゃんの仮装大賞”って番組があるでしょ？ あれを見ていて思いついたんですよ(笑)。とっても楽しみなんです」

取材・編集：岡島朗

### プロフィール

小林 淳一 (こばやし・じゅんいち)

江戸東京博物館学芸員、同館学芸課長、米国ビーボディー・エセックス博物館客員研究員(1997-98年)、東京都美術館副館長を経て、現在、江戸東京博物館副館長。国立歴史民俗博物館客員教授、長崎純心大学大学院客員教授。



## 人間国宝・野村萬氏が語る、 「2021年、初春に思うこと」。

2021/03/19 公開

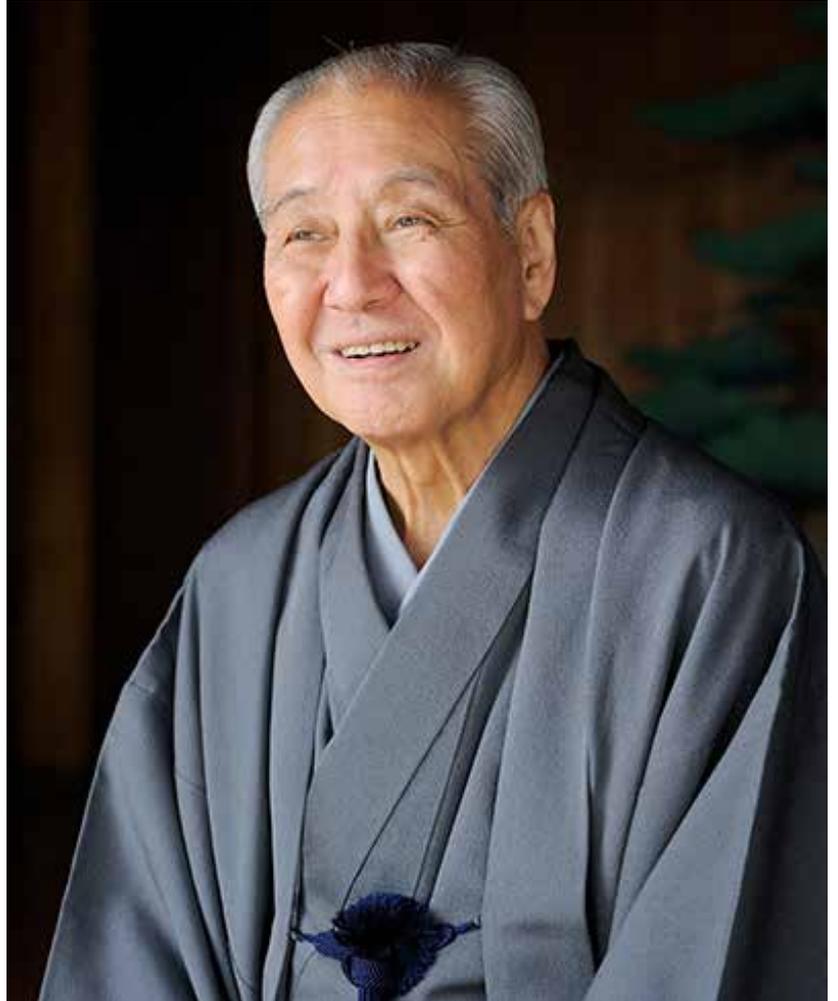
コロナ禍により、すべての産業と同じように、文化芸術活動も停滞を余儀なくされている今、舞台芸術活動はどのように復興の道を歩んでいくのか……。

公益社団法人日本芸能実演家団体協議会会長であり人間国宝でもある野村萬氏に、さまざまな観点から「今思うこと」をお話いただきました。

### 2020年は、数ヶ月に及んで 予定が真っ白になりました。

昨年、突如としてあらわれた新型コロナウイルスにより、世界中が未曾有の事態に陥っており、実演芸術分野はいち早く活動自粛を余儀なくされ、私の予定も2020年は数ヶ月に及んで真っ白になりました。

Tokyo Tokyo FESTIVALのプログラムでもあり、2008年から毎年行われてきた「キッズ伝統芸能体験」に関しても国立能楽堂での開講式が中止になってしまいましたが、このプログラムは、日本の将来を担ってくださる子供たちが、日本の宝である伝統芸能を学んでくださる、素晴らしいものです。



日本芸能実演家団体協議会 会長／狂言師 野村萬さん



仕舞 (撮影：菅原康太)



仕舞 (撮影：菅原康太)



箏曲 (撮影：武藤奈緒美)

### 開講式で感じる子供たちの まっすぐで豊かな感受性。

いつも開講式の挨拶で子供たちに話をするのが、舞台に存在感を持って位置するためには、自分の目では見えないところ、たとえば足の裏であったり、背中であったり、そういうところにしっかりと神経を働かす、このことが舞台に存在するための大切な要素なのです、ということです。

そうすると、すぐに子供たちは佇まいを正して、言われたことを反復しながら、背筋を伸ばしきちんと座り直します。これを毎年子供たちがやってくれる。そのことがなんとも素晴らしく、子供たちの感受性の豊かさを感じる瞬間です。



野村萬会長（撮影：武藤奈緒美）

## 非常時のやむを得ない状況から新しい様式を発見していくこと。

「キッズ伝統芸能体験」に限らず、そもそも能というものは、当然声を出すことからお稽古が始まっていきますけれど、今はとにかく「大きな声を出してはダメ」「飛沫はダメ」とされていますし、マスクをしなくてはなりません。でも能という芸能は、大部分仮面というものを付けて演技をします。考え方によっては、マスクをしながらか息を吸う、というのは仮面をつけていることにも近いわけです。非常時でやむを得ずこういう状況になっていますが、芸を高めていく過程において、新しい様式であったり、鍛錬や訓練の方法を発見していくことも大事な要素であるはず。つまり、マスクをしなくてはならない状況をプラスにできることもあるかもしれません。

## 歴史を振り返りあらためて思うこと。

私どもは伝承・伝統の中にいるわけで、私は父からものを教わり、父は祖父から教わりました。その祖父は、明治維新というものを体験し、父は関東大震災や第二次世界大戦を体験しました。明治維新の話としては、武家による統治が崩壊し、新しい体制になりました。それまでは幕府で儀礼の際には必ず能を舞っていたわけで、能や狂言は江戸時代まで武家の後ろ盾を得ていました。そうやって武家の祿を喰っていたものが、それができなくなってしまい、どうやって生きていけばいいのか、となってしまった。挙句、江戸時代までに伝わってきた狂言の3つの大きな流儀のうちの一つは潰れてしまいました。おそらく世の中の体制に順応できなかったのでしょう。あるいは新しい様式や、ものごとを発見できなかったのだと思います。明治維新とは、そのくらい強烈なものだったということです。

## 非常時の厳しいときこそ力を蓄えるべき。

関東大震災に関しては私は体験していませんが、第二次世界大戦が始まった頃は私は小学6年生で、中学・高校と、戦争一色でした。そういう非常時には舞台はなく、父は時間がありましたから一生懸命稽古をしてもらいまして、今思えば、非常時の厳しいときこそ、何かを発見したり、力をつけたり、力を蓄えるのですね。そして戦争が終わって、伝統芸能というものをどうやって生き生きとやっていくか、どんな風に再出発するか、蓄えた力を基にしっかりと取り組んでいくのです。

戦後の話で申しますと、上方、つまり関西にとっても勢いがあり、素晴らしい古典芸能の方たちがたくさんいらした。具体的には、武智鉄二という方の存在が大きかったと思います。たとえば若手の歌舞伎役者を起用し、古典歌舞伎を演出し、「武智歌舞伎」として注目を集めたり、大きなエネルギーとなって戦後の伝統芸能を復活させました。新型コロナウイルスの収束はまだまだ見えませんが、収束を迎えた暁には、私はもう高齢ですから前面に立つなんていうことはできませんけれども、エネルギーを持って動き出す若い人たちをバックアップしていく、そういう位置にはいなければならないと思っています。

## 忍耐のその先にこそ喜びや楽しさが存在する。

また、朝日新聞で「折々のうた」というコラムを連載していた大岡信さんが、海外へ出てあらためて日本の文化を見たときに、辛抱とか我慢とか耐える心、そういうものが日本の文化を位置付けているとおっしゃいました。確かに私たちの舞台もそうで、忍耐を通ったその先にこそ喜びがあり、楽しさとなるわけで、何もなくて楽しいなんていうのは日本の文化とは違うと思います。

新型コロナウイルスというものに対しても、震災や戦争とはまた違う意味の忍耐が必要で、それはもう演者だけではなく観る側のお客様にも耐えることをお願いしなければならないわけです。そして、耐えて耐え忍んだ後に、収束が見えた暁には、伝統芸能の花を咲かせて欲しい、咲いて欲しいと強く強く願っています。



三味線（撮影：武藤奈緒美）



日本舞踊（撮影：武藤奈緒美）



小鼓（撮影：武藤奈緒美）

## 芸術・芸能は遊びではない、 人間性を高めるもの。

今、それぞれのジャンルで若い方々が知恵を絞っている新しいことにもチャレンジしていますね。映像もそれは素晴らしいものです。一方で、生の舞台を、どういう風に生きた舞台として創り上げていくか、舞台がいかにあるべきかということ位置付けなくてはなりません。

正直申しまして、「大きな声を出しちゃいけない」という現状において舞台へ出てもなると言いますか、生煮えであり、心も半端で……。舞台に立っているとお客様の心がとっても高揚しているなっていうのは伝わってくるものです。ですから制約がある今は、どうしても我慢が必要です。現状は客席の人数を減らしながらやっていますけれど、舞台と観客は一体になっていくことが一番大切で、舞台と観客が呼応しながら一つの舞台芸術を創っていくことこそが本来のあるべきかたちであると思っています。そういうときが戻ってくるまでお客様と共に耐えなければなりません。

そして、このような状況において、昨年には国で文化芸術復興のために560億円もの第二次補正予算が成立しました。政治家の方も「芸術・芸能は遊びではない、生活の中で、人間性を高めていくために必要なものです」とおっしゃってくださいました。これは文化政策史上大きな進展です。この「芸術・芸能は遊びではなく、人間を育むための要素である」ということを、民、すなわち世の中の皆さまにも理解いただき、文化芸能の火を再び燃え上がらせたいと思っています。

## 年代を超えてスクラムを組み 舞台芸術を花開かせて欲しい。

感染しないような演出だとか、新しい試みもあるとは思いますが、じゃあ、古いものを新しいものに変わってまで能をやることになるのか……。

戦争が終わったときは、能や狂言、歌舞伎も何もみんな一緒にスタートラインに一緒に立ちました。そういう出発だったんですね。今回もそういうことが必要かもしれません。第一線でやっていく人たちが、周りをリードできるか、民を引き寄せられるか、それにはやはり文化芸術が社会性のあるものなのだという理解をさらに得ることが重要です。

そしてもう一つ大事なことは、「老」「壮」「青」の世代がスクラムを組んでいくこと。華があって魅力ある若い人たちに頑張ってもらって、年寄りにはバックボーンになる。そういう仕組みをしっかり作っていくこと、収束してからではなくて、つらい状況の中でも体の中に胎動をしっかり持って充実させていかなければなりません。それはプレーキを踏みながらアクセルを踏むような、ある意味ジレンマの生じる作業かもしれません。それでもエネルギーにあふれた伝統芸能であり、舞台芸術を花開かせて欲しい。

ですから冒頭の言葉に戻れば、3月に「キッズ伝統芸能体験」の発表会が予定されていますけれど、子供たちが頑張っている姿をしっかり緊張感を持って見させていたきたいと思っています。芸能の将来は明るいなあと思える発表会を本当に期待しています。

取材・編集：東美津子



2019年度発表会 謡・仕舞 (撮影：菅原康太)



2019年度発表会 狂言 (撮影：菅原康太)



2019年度発表会 箏曲 (撮影：武藤奈緒美)

### プロフィール

野村 萬 (のむら・まん)

和泉流狂言師。故六世野村万蔵(人間国宝)の長男として東京で生まれる。父に師事。4歳で初舞台を踏む。1993年七世万蔵を襲名、2000年初世萬を名乗る。現在も多くの舞台で活躍する。重要無形文化財狂言保持者各個人指定(人間国宝)、日本芸術院会員、文化勲章受章者。

さらに、舞台芸術活動に留まらず、(公社)能楽協会顧問、1999年より(公社)日本芸能実演家団体協議会(芸団協)の会長を務めている。

芸団協は、俳優、歌手、演奏家、舞踊家、演芸家、演出家、スタッフや制作者などあらゆる実演芸術分野の団体を正会員とする公益法人で、現在の会員数は68団体(2021年3月時点)。実演家の権利に係る集中管理事業を、実演家著作隣接権センター(CPRA)を設置し行うと共に、廃校を活用し設立した「芸能花伝舎」の運営など実演芸術振興事業を通じ、広くわが国文化の振興発展に寄与することを目的としている。

また、2003年設立、2021年3月現在、文化芸術関係22団体で構成される文化芸術推進フォーラム議長として、超党派の国会議員による文化芸術振興議員連盟と連携し、文化芸術基本法の制定に取り組みと共に、文化芸術立国を実現すべく、「文化芸術省」創設の運動を牽引している。



THE FUTURE IS ART

## Interview Vol.10

アーティスト/ライゾマティクス主宰 真鍋 大度さん

コロナ禍ではとにかく手を動かし、できたプロトタイプを実験的に配信

# Design Thinking ではなく Creative Action を。

2021/03/30 公開



アーティスト/ライゾマティクス主宰 真鍋大度さん  
Photographer: Akinori Ito Stylist: Miter Shinichi Hair and makeup: Asami Nemoto

世界的に活躍するビョーク氏や狂言師・野村萬斎氏とのコラボレーション、Perfumeのライブ演出におけるテクニカルサポートなど、斬新な表現で国際的にも高い評価を得ているライゾマティクス。

2019年秋には、ライゾマティクスによるTokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13「Light and Sound Installation “Coded Field” ～光と音が織りなす都市と人々の饗宴～」を増上寺にて開催。いよいよ2020年の五輪へ——という中で、新型コロナウイルスが感染拡大しました。

ライゾマティクスは2020年をいかに過ごしたのか。ファウンダーの1人である真鍋大度さんに、アートとテクノロジーの今後の展望とともに伺いました。

## できることを見つけて、手探りで始めた

2020年初頭より新型コロナウイルス感染症が拡大し、ライゾマティクスの活動にはどのような影響がありましたか？

僕たちは去年、大きなプロジェクトがいくつかありましたが、それが一時的にペンディング状態になりました。状況がどうなるか誰も分からない中で、スタンバイをして、何かあったらいつでも動きだせる状態にしておかないといけない。大きく動くことができない状態が、結構長い間……半年以上続きました。

そういった中で、大学の同級生のムロツヨシ君と一緒にリモート演劇をやったり、結果的にはこんな状況でしかやれないことをやっていました。

早い時期から、オンラインイベント「Staying TOKYO」を企画、主宰されました。

「Staying TOKYO」を始めたのは、緊急事態宣言が出る直前です。3月の段階で、4月以降のプロジェクトはほとんどキャンセルか延期。そのままやるというのはほぼ無くなり、状況が良くなることも当分は考えにくいな、と。

そうなるもライブもできない。僕たちは特に現場の仕事も多いので、外で会うことができなくなった時に情報発信するとなると、やはりオンラインでの配信になります。

これまで僕たちは、自分たちでプラットフォームを持って発信する、ということはやっていませんでしたが、Twitchの方たちはアメリカ西海岸で作品発表をするといつも来てくれて交流があり、前々からTwitchで何か面白いことをやってほしいという話がありました。

その流れで、ちょっと実験的に配信をやってみようかなと思ったのがきっかけですね。それがどのくらい続くのか、どれくらい反響があるかも分からない中、手探り状態で始めました。

反響はいかがでしたか？

4月に入った段階で、結構クリエイターの人たちはいろんなことにチャレンジしようとしてたと思うんですね。ライブがオンライン配信になって、バーチャルになって、いろいろなアイデアや実験が行われていて。

僕たちも同じように実験を。普段だったら、結構完成度の高い状態で本番を迎えるのですが、まだまだ全然作り途中のもの、プロトタイプでも配信を通じてちょっと試してみたり、僕がDJをやって新しいツールを使ってみたり。

本当に突然いろいろなエンタメコンテンツが無くなってしまった状態で、テレビもずっとコロナのことばかりやっていたので、そういった中で見てくれている人たちに勇気づけられたらいいな、となんとなく思っていました。

## 需要に応えるだけでなく、新しい何かを

オンラインコミュニケーションツール「Social Distancing Communication Platform」も発表されましたね。

そうですね。段々Zoomでやり取りするようになって、僕もZoom飲みもやりましたが、やはりバーとかクラブとか、そういう不特定多数の人と一緒に同じ場所で緩やかに飲むのとはちょっと違う。

何かそういうスペースが作れたらいいなと思って、アーティストのKyle McDonaldさんと話していたのがきっかけでアイデアを出し、実装はフロウプラトウの制作チームが担当しました。

昔だったらたぶん開発に時間がかかったと思うんですけど、今はいろんなツールがあるので、2週間くらいで最初のアルファバージョンを作りました。

距離感などが面白いです。

バーとかだと近い人と話して、遠くの人声が聞こえない。20人とか30人いても、いくつかのグループに分かれていきますよね。そういう状態ができたらしいなと思って。

最初の目的は、会議やオフィスで使うというより、クラブやバーの状態を作り出すということで始めたんですけど、当初想像していたのとは違う使い方もされていて、それも面白いな、と思っています。

どのような使い方を？

大学のオープンキャンパスですね。僕は教育の現場にもいるんですけど、学生たちがなかなかコミュニケーションを取る機会がない。大学でも使ってもらえるといいな、というのは途中から考えていました。

デジハリ(デジタルハリウッド大学)のオープンキャンパスでは、場所を移動できる場所を活かして、例えば〇×クイズみたいなので「〇だと思ったら左の方に行ってください」とか。そういうゲームも作られていて、なるほどこういう使い方もあるんだと思いました。

パンデミックから1年が経ち、withコロナ様式での活動を振り返り、それ以前と比べてどのような変化がありましたか？

紅白歌合戦もそうですし、リオ2016大会閉会式東京2020フラッグハンドオーバーセレモニーもそうですけど、ライゾマはコロナの前から生中継の配信で、ARをはじめいろいろな演出を行ってきました。

なので割とすぐに配信にはシフトできて、コロナの状態になったから始めたというより、元々やっていたことがどんどん一般的になっていったと感じています。

でも、そのスピードがすごく早かった。我々としては、もちろんそういう需要や期待に応える意味でやっていましたが、それ以外の新しいことを何かやらないとな、とは思っています。



ライゾマティクス「Staying TOKYO」2020年  
Online event by Rhizomatiks 【参考図版】  
「Social Distancing Communication Platform」のプロトタイプ画面



現在はHEERE(ヒア)と改めてサービスをスタート。  
<https://heere.chat/>

例えば、ロボットを使ったテレコミュニケーションシステムを作ってみたり、SPOTというBoston Dynamicsのロボットに遠くから乗り移って、コミュニケーションするようなものを作ったり。Zoomの拡張機能を開発したり。

ただ、どうしても実験的なものが多く、本腰を入れてじっくりやるというよりは、とにかく手を動かして、できたプロトタイプを世の中にすぐに出すという状態。ラピッドな短期間の開発が多くなったなと思います。

「マスクとテクノロジーの融合」といったツールも開発されたとか。

それはライゾマの花井裕也というエンジニアがアイデアを出して、彼を中心に開発しました。彼はライブの現場が戻っても、声をあげて叫ぶことができる状態にはしばらくはならないだろうと予想しています。たぶんそのフェーズが1番長いだろうと。

だからマスクを着けていることを優位に考えて、マスクにデバイスを付ければ、声も呼吸も取れるし、ささやき声でも解析して音声認識ができる。そういうアイデアです。

エンタメの現場で声は出せないけど、飛沫を飛ばさないようにしながら、声を出す代わりにアクションを起こせるようなツール。

あとは、ライゾマの石橋素が中心となって制作した、自宅でスクリーンを拡張するようなデバイスですね。家でもスクリーンの中の照明装置と同期して、部屋の中がライブ会場になるような。そういうのも作りました。

単純に“配信する”ということももちろんやりましたが、それ以外に、我々はハードウェアのエンジニアも多いので、映像とかバーチャルということだけでなく、実際に新しいハードウェアを開発する、ということもいくつかやっていました。

まだプロトタイプっぽいものばかりで、大量生産までには至っていませんが、何かの形で使っていけるようになればと思っています。

## アートの世界においても大きな転換点

次なるステージに向けて、本年1月末、株式会社ライゾマティクスは株式会社アブストラクトエンジンとなり、社名および組織を変更されました。その中で真鍋さんの役割についてお聞かせください。

株式会社ライゾマティクスでの僕の役割は、新しいことを考えて、実際にそれを作って世の中に届けるということだったかな、と。株式会社アブストラクトエンジンになってもそこは変わらないと思います。

ちょっと経営的な話になってしまいますが、より研究開発ベースの制作などがやりやすくなれば、ということで組織変更しました。

ただ、今後のライゾマティクスの方向性を決めるのは僕と石橋（ライゾマティクス主宰）ですが、テクノロジーの進化や、時代の変化の影響をものすごく受けるジャンルなので、我々が意思決定しても、世の中の変化には敏感に反応していかなくてはならない。自分たちだけでコントロールできないところも大きいとは思っていますね。

今後、アートとテクノロジーはどのように変化していくとお考えでしょうか？

テクノロジーは昔からあって、日常生活の必需品でありプラットフォームでもありました。本当にすごいスピードで日々進化していると感じます。

例えばブロックチェーンやビットコインのような暗号通貨は、数学とテクノロジーそのもの。中央集権的な承認などもなく、本当に数学だけで証明ができてしまう世界ですよね。そういったものが、これからたぶんどんどん増えていく。

アートの世界でいうと例えば、どここのギャラリーで作品発表したとか、オークションハウスに出したとか、そういう権威的なことで価値がついていたと思いますが、今は違う付加価値の付き方が出てきています。ここは大きな転換点になるかもしれないですね。



Home Sync Light  
写真提供：ライゾマティクス



『ライゾマティクス\_マルチプレックス』  
2021年3月20日(土・祝)～6月20日(日)  
東京都現代美術館 企画展示室 地下2F  
<https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/rhizomatiks/>

本年3月には東京都現代美術館で、個展『ライゾマティクス\_マルチプレックス』が開催されます。どのような思いで取り組んでいらっしゃいますか？

個展は、ライゾマではあまりやっていないので、集大成的なことを期待されるところもあるでしょうし、単発の作品を展示するのはちょっと意味合いが変わってくるので、展覧会全体でどういうメッセージを作っていくのか考えています。

そういう作業は今まであまりなかったので、新しい試みですね。

今回の展覧会は、僕たちにとっていろいろな挑戦があると思います。言葉ではなく作品を通じて、いろいろなことが証明できたらと考えています。

最後に、メッセージをお願いします。

メッセージは特にはないです(笑)。……けど、いろいろなアクションを起こしているんで、ぜひオンラインでもオフラインでもチェックしてもらえると嬉しいです。

取材・編集：加藤瑞子



野村萬斎 × 真鍋大度《FORM》2017年1月2日～3日  
東京国際フォーラム  
© Hiroyuki Takahashi / NEP  
[参考図版]



Perfume《Reframe 2019》2019年  
撮影：上山陽介  
[参考図版]



ライゾマティクス「2045×LIFE PAINT Supported by VOLVO CAR JAPAN」2016年  
Photo by Muryo Homma  
[参考図版]

#### プロフィール

真鍋 大度 (まなべ・だいと)

東京を拠点に活動するアーティスト、インタラクティブデザイナー、プログラマー、DJ。

2006年Rhizomatiks設立。身近な現象や素材を異なる目線で捉え直し、組み合わせることで作品を制作。高解像度、高臨場感といったリッチな表現を目指すのではなく、注意深く観察することにより発見できる現象、身体、プログラミング、コンピュータそのものが持つ本質的な面白さや、アナログとデジタル、リアルとバーチャルの関係性、境界線に着目し、デザイン、アート、エンターテインメントの領域で活動している。